日本國語大辞典

第十五巻

編集　日本大辞典刊行会
発行　小学館

日本国語大辞典　第十四巻

昭和五十年三月一日　第一版第一刷発行
昭和五十五年七月一日　第一版第六刷発行

編集　日本大辞典刊行会
発行者　相賀徹夫
印刷者　小林清

発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋二-三-一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八-二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

編集顧問

金田一京助
佐伯梅友
新村出
時枝誠記
西尾実
久松潜一
諸橋轍次
山岸徳平

編集委員

市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田巖
吉田精一

（五十音順）

とーふ【十編・十布・十符】〔名〕（「ふ」は編み目の意）目を十筋に編んだもの。〔発音〈標ア〉〔上〕〕

とふ の編笠（あみがさ） 編み目が十筋ある編笠。*随筆・柳亭筆記―四「十二符わけの編笠〈略〉編目の十二あるをいふ也〈略〉ふるくより十符の編笠の名ありし故に十二符かけたるとは理るなるべし。〈略〉菅笠にも十符の名ありし歟」

とふ の菅薦（すがごも） ①編み目が十筋もある幅の広い菅薦。*和泉式部続集―上「たまさかにとふのすかこもかりにのみくれはよとのにしく物もなし」*堤中納言―よしなしごと「玉江に刈る真菰にまれ、逢ふ事交野の原にある菅菰にまれ、たためらむを貸し給へ。とふのすがごもな給ひそ」*綺語抄―中「とふのすがごもとは、こもをとふしまでこめてあみたるなり。ひろくせんとてしたる也。みちのくのとふのすがごもななふにはきみをしなしてみふにわれねん又云、とふのこほりといふ所におふるこもの、とふしあるなり」*和歌童蒙抄―六「彼国にとふの郡といふ所のあれば、それにつきてとふのすがごもとよみて、やがてふのとをあるに取なせるとぞ聞えたる」②〈古歌の「みちのくの十編の菅薦七編（ななふ）には君をしなして三編（みふ）に我寝ん」から〉転じて、男の側に女が添い臥すこと。*浮世草子・男色大鑑―二・一「十符（トフ）のすがごも七婦には、君の御寝姿を見て、夢もむすばず」*歌舞伎・与話情浮名横櫛（切られ与三）―九幕（近代日本文学大系所収）「妻がさねして蒲団さへ、十編（トフ）の菅薦（スガゴモ）まかせぬ義理に、隔つふしども障子ごし」〔補注「綺語抄」や「和歌童蒙抄」にいう「とふの郡」は所在不明。〕

とふ の菅（すげ） 十編の菅薦を編むのに使用する菅。*俳諧・奥の細道―壺の碑「かの画図にまかせてたどり行ば、おくの細道の山際に十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調て国守に献ずと云り」

とふ の束並（つかなみ） 編み目が十筋ある藁製の敷物。*散木奇歌集―冬「嵐のみたえぬみ山に住む民はいくへかけけるとふのつかなみ」

とーふ【妬婦・妒婦】〔名〕嫉妬心の強い女。悋気（りんき）深い女。*雑談集―六・錫杖事「妬婦（トフ）は家を破ると云て」*読本・雨月物語―吉備津の釜「妒婦（トフ）の養ひがたきも、老ての後其功を知ると、咨（ああ）これ何人の語ぞや」*新序―善謀上「従二母言一、是為二賢母一、従二妻言一、是必不レ免レ為二妬婦一」〔発音〈標ア〉〔上〕〕

とーふ【都府】〔名〕みやこ。都市。*菅家後集「南館夜聞二都府礼仏懺悔一」*古今著聞集―二〇・六三「それにのりて午の剋よりかみには都府の政にしたがひ」*西国立志編〈中村正直訳〉八・二五「都府より数里外の遠きに送り、六歳に至るまで、乳養すべし」*白居易・鄭綱可吏部尚書制「国之都府、半在二東周一」〔発音〈標ア〉〔上〕〕

とーふ【塗布】〔名〕ぬりつけること。一面にぬること。*海に生くる人々〈葉山嘉樹〉五「安井―水夫見習―は、その全半身にただ気やすめだけのイヒチオールを塗布された」〔発音〈標ア〉〔上〕〈余ア〉〔上〕〕

とーふ〔連語〕 ⇨とう

とーぶ【飛・跳】〔自バ五（四）〕①空をかける。鳥や飛行機などが空中を行く。空中を舞う。高く舞いあがる。とむ。*古事記―下・歌謡「天登美（トブ）鳥も使ぞ 鶴が音の 聞えむ時は 我が名問はさね」*源氏―夕顔「白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ、空とぶ雁の声、取り集めて、忍び難き事多かり」*色葉字類抄「飛 トフ」*方丈記「風に堪へず、吹ききられたるほのは飛が如くして、一二町をこえつつ移りゆく」②空を切って行く。勢いよく目的物に向かって行く。「弾丸が飛ぶ」*行人〈夏目漱石〉兄・二四「兄の鉄拳の飛（トブ）んで来るのを待ってゐた」③はねる。跳躍する。おどる。*書紀―雄略九年七月（前田本訓）「赤駿（あかうま）に騎れる者（ひと）に逢ふ。其の馬時に濩略（もことか）にして龍のごとくに蠢（トフ）」*平家―一一・能登殿最期「能登殿ははやわざやおとられたりけん、やがてつづいてもとび給はず」*浄瑠璃・鑓の権三重帷子―上「悲しや弟の甚平門からは出られぬ。裏門はなし塀高し、とんづ押しつうろつく間に」④空中に散る。空（くう）に散乱する。飛散する。*万葉―四・五四三「待乳山越ゆらむ君は もみち葉の 散り飛（とぶ）見つつ〈笠金村〉」⑤〈宙にはね上がるようにして落ちる意から〉切れる。切られる。「首が飛ぶ」「ヒューズが飛ぶ」⑥走る。かける。速く行く。走りまわる。*浄瑠璃・傾城反魂香―中「思ふ願ひがかなはずは、西所川原か舟岡へすぐとばふと思ふ気で」*社会百面相〈内田魯庵〉貧書生「点燈会社に住込んで脚達を担で飛んだ事もある」⑦〈多く「飛んで行く」「飛んで来る」「飛んで出る」などの形で用いて〉急いで移動する。あわててやる。*銀の匙〈中勘助〉前・三九「番頭や女中たちがとんできて」*北東の風〈久板栄二郎〉一幕「はッ。飛んで行かはりましたけど」⑧すぐになくなる。消えてしまう。*歌舞伎・東海道四谷怪談―四幕「たった一まひのどてらは、大家がたて催促に飛（ト）んでしまふし」*今年竹〈里見弴〉二組の客・五「いい心持ンでもなってようもんなら、昨夜の夜なべ仕事ぐらゐすぐどっかへ飛んぢまふし」⑨間を越えて先へ移る。間を省略して次に行く。また、順序に従わずへだたる。他に移る。はなれる。*社会百面相〈内田魯庵〉古物家「時にお話は飛びますが」*三四郎〈夏目漱石〉四「与次郎の話はそれから、それへと飛（ト）んで行く」⑩ひろまる。あまねく伝わる。早く普及する。世間に伝わる。伝播（でんぱ）する。*ごりがん〈上司小剣〉一「隆法の葉書が、方々へ飛んだ」⑪取引市場で、相場が急に、大幅に騰貴することをいう。⑫逃亡する、行方をくらます意をいう、盗人・てきや仲間の隠語。〔日本隠語集〕〔方言走る。急ぐ。福島県173 群馬県多野郡「百メートルとぶ」240 埼玉県秩父242 東京都八王子280 神奈川県286 伊豆三宅島308 新潟県402 甲斐151 山梨県、早くとべ」510 長野県520 岐阜県恵那郡548 静岡県566 愛知県宝飯郡050 三重県604 徳島県805 熊本県下益城郡949 大分県956 《とべこくる》土佐土佐郡寺川481〕〔語源説〕(1)トクフ（疾経）の義〔名言通・和訓栞〕。トフ（速経）の義〔言元梯〕。ト（疾）を活用した語か〔国語の語根とその分類＝大島正健・大言海〕。(2)トヲヒク（遠引）の反、またはトヲフル（遠経）の反〔名語記〕。遠キニフル（歴）の義〔紫門和語類集〕。(3)鋭振の義〔日本語源＝賀茂百樹〕。(4)トブ（鳥羽）の義〔和語私臆鈔〕。(5)トは止まる所一方ならず広がり進む義〔国語本義〕。〔発音〈標ア〉〔○〕〈ア史平安●○鎌倉・江戸●●〈余ア〉〔○〕〔古辞書色葉・名義・和玉・文明・饅頭・黒本・易林・書言〕〕

とばず 鳴かず おもてだった活動をしないでいることにいう。鳴かず飛ばず。*青年〈森鷗外〉一二「『まだ何も書いて見ないのですか』『ええ。蛰（ト）ばず鳴（ナ）かずです』」

とばんと するものは翼（つばさ）**伏す** まさに飛び立とうとする鳥は、一度翼を下におろす。大いに発展しようとするものは一時雌伏することのたとえにいう。

とぶ 車（くるま） 空を飛ぶ車。*竹取「立てる人どもは、装束の清らなる事、物にも似ず。とぶ車一つ具したり」*宇津保―菊の宴「雲にだに心をやらばおほ空にとぶくるまをばよそながら見む」*富岡本栄花―御裳着「とぶくるまのかたをつくりて、水車つくりたる。池には色々のはちすをつくり」〔古辞書色葉〕

とぶ 鳥（とり） ⇨親見出し

とぶ 螢（ほたる） 飛んでいる螢。《季・夏》*俳諧・中庸姿「目にあやし麦藁一把飛螢〈高政〉 次郎ま次郎吉夏草の陰〈同〉」

とん て 火（ひ）**に入る夏**（なつ）**の虫**（むし） みずからを滅ぼすような禍の中に進んで身を投ずることのたとえにいう。*源平盛衰記―八・法皇三井灌頂事「智者は秋の鹿鳴きて山に入、愚人は夏（ナツ）の虫（ムシ）飛（トン）で火（ヒ）に焼（ヤク）とぞながめさせ給ける」*浄瑠璃・国性爺合戦―四「関の大将右龍虎左龍虎、すは国性爺、とんで火に入（イル）夏の虫」*人情本・春色梅美婦禰―四・二二回「また籠平も平なる、奴にあらねば天罰を、恐れず侠客の只中へ、飛（トン）で火に入（イル）虫同前」

と・ぶ【富】〔自バ四〕「とむ（富）」に同じ。*今昔―二九・三六「然れば彌（いよい）よ富び増（まさ）りて、財（たから）失する事无し」

ど・ふ【土府】陰陽道でいう土神の一つ。正月は丑方、二月は巳方というように毎月移動し、その月にその方角の土を取ると家人に死者が出るという。土府神。*暦林問答集―下・釈土公遊行土府所在・土府者、正月丑、取二丑方土一煞二家長一」

どぶ【溝・溷】〔名〕①下水（げすい）、雨水などを流す細いみぞ。*雑俳・筑丈評万句合「さそはれて霊地の花の下水へ散り」*談義本・風流志道軒伝―五「学者もどぶへ捨てた事なく、祭の醴（あまざけ）より外に、内で酒を作りたる先生もなし」*滑稽本・浮世床―二・下「身を退（ひい）て、除やうとすると、溝（ドブ）の端（はた）だから、馬除溝（ドブ）の中へ落」*門〈夏目漱石〉一六「水に乏しい所で、暑い時には往来へ泥溝（ドブ）の水を撒く」②釣りで、川の流れのゆるやかな深い淵をいう。「どぶ釣り」〔〔○〕江戸時代、浅草溷店（どぶだな）の略称。ここに安立山長遠寺という日蓮宗の寺があり、堀の内の妙法寺、池上の本門寺とともに日蓮宗における屈指の寺として知られた。また、浅草新寺町（台東区元浅草二丁目）の門前町にあった私娼窟（俗に「どぶだな」といった）の略称。*雑俳・柳多留―二四「鳥籠のひごから逃てどぶをこし」〔方言①濁水。*「昨夜の雨で川はどぶが流れよる」高知県842 ②汚水。山梨県南巨摩郡奈良田510 ③泥。伊豆八丈島末吉310 鹿児島県種子島986 ④ぬかるみ。山梨県502 福岡県博多906 ⑤池。ため池。水たまり。青森県三戸郡118 新潟県西頸城郡428 富山県435 福井県大野郡466 山梨県504 長野県上伊那郡530 静岡県小笠郡563 ⑥淀。大分県大分郡959 ⑦深淵。ふち。長野県514 静岡県富士郡上井出016 ⑧滝つぼ。新潟県中頸城郡桑取・富山県中新川郡立山016〕〔語源説〕(1)泥淵の義〔和訓栞〕。(2)トフ（泥深）の義〔言元梯〕。ドロフカ（泥深）の義〔名言通〕。(3)ドブ（土腐）の義〔俚言集覧〕。(4)ドブドブとしているところから〔濁語考・画証録〕。(5)排水不十分な足入の地をいうドブからの転用〔地名の研究＝柳田国男〕。〔発音〈ナまり〉ダブ〔島根〕トベ・ドベコ〔福島〕ドベ〔島根・豊後・大分〕ドンブ・ドンボ〔岐阜〕〈標ア〉〔○〕〈余ア〉〔ア〕〕

どぶ へ うっちゃると思って 捨てたつもりで。損を覚悟で。*諺苑「どぶへうちやると思ひて 物を乗る心にて損をするをいとはぬ、決する詞なり」

どぶ〔名〕鉱石を溶かして精錬するとき生ずるかす。からみ。*日本山海名物図会―一・銅山床家「石土の湯になりたるをからみといふ。又どぶともいふ」

どぶ〔名〕①「どぶろく（濁醪）」の略。*浮世草子・沖津白波―四・一「ふく汁ふく汁あたたまるねぶかそろへてどぶそへて、跡で新酒をどぶどぶと、ふたりつれ立さあさあ宿に」*浄瑠璃・本田義光日本鑑―二「どぶなりと買（かい）にいて、沸かして飲まふと思ふ所」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

*歌舞伎・心謎解色糸=序幕「爰に左七、濁酒(ドブ)を取り、ずん切と鳶の者酒を飲み居る」 ②酒粕を摺(す)り延べてとろとろにし、煮返してこしたもの。料理のだしに用いる。*料理物語=八「どぶとは 何時もさけのかすをしぼりたるがよし。にごりざけはあしく候」*料理早指南大全「どぶ 極上の酒のかす、水にてとろとろにすりにかへし、こして遣ふを云」*俚言集覧「どぶ 料理にタレの名」 方言濁醪。新潟県北魚沼郡湯の谷(山詞)016 飛騨539 滋賀県蒲生郡050 和歌山県日高郡682 山口県防府762 大分県速見郡959

どぶ 〔名〕 方言①肥満した者。和歌山県東牟婁郡下里686 ②くらげ(水母)。和歌山県田辺678 愛媛県827 ③はらわた。広島県高田郡755 大分県西国東郡呉崎957

どぶ-いし 【溝石】〔名〕どぶの両へりに積みならべた石。*当世少年気質〈巌谷小波〉一「向ふの黒板塀の下の、溝石(ドブイシ)の上に」 発音〈標〉〇

どぶ-いた 【溝板】〔名〕どぶを覆う板。下水板。*談義本・根無草=前・三「かんなべさげて足も空、どぶ板をふみぬきながら、裾をまくって走り行く」*滑稽本・七偏人=初下「敷連たる溝板(ドブイタ)を勇みにいさんで踏轟かし」*にごりえ〈樋口一葉〉四「足もととては処処に溝板(ドブイタ)の落し穴、あやふげなるを中にして」 発音〈標〉〇 会〈〇〉

どぶ-いたち 【溝鼬】〔名〕下水の辺に住むイタチ。*俳諧・崑山土塵集「水の道きれるこほりや溝鼬〈方成〉」 発音〈標〉イ

どぶいた-やろう …ヤラウ 【溝板野郎】〔名〕(溝板はきたないところから)人をののしっていう語。*歌舞伎・助六廓夜桜「ここな、どぶ板野郎の、たれ味噌野郎の出し殻野郎の、そばかす野郎め、引込みやがらねえか」 発音ドブイタヤロー〈標〉エ

どぶ-うう 【土風】〔名〕その地方の風俗・風習。その地方の民の気風。くにぶり。*続日本紀=養老元年九月戊申「諸国司等詣二行在所一。奏二土風歌儛一」*日本後紀=弘仁元年一一月丙辰「御二豊楽院一。悠紀主基両国献二甑好雑物一。奏二土風歌舞一」*和漢朗詠=下・酒「先づ阮籍に逢うて郷導と為す 漸くに劉伶に就いて土風を問ふ〈橘正通か〉」*陸機=呉趨行「山沢多二蔵育一、土風清且嘉」 古辞書色葉・文明・易林・書言

と-ぶえ 【鳥笛】〔名〕特定の鳥の鳴き声と同じ音の出る笛。鳥をおびき寄せるために用いる。*あこがれ〈石川啄木〉おもひ出「恋鳥の鳥笛(トブエ)たのしくよろこびぞ胸にもえにし」

ドーフォレスト (Lee De Forest リーー) アメリカの電気工学者。三極真空管の発明をはじめ、無線技術の発達に多くの貢献をした。(一八七三―一九六一) 発音〈標〉レ フォ

どぶ-が 〔名〕溶かした鉱石を冷やす場所。*日本山海名物図会=一・銅山床家「わかしたるあかがねをひやす所をどぶがといふなり」

どぶ-がい …がひ 【土負貝・溝貝】〔名〕(「どぶがい」とも) ①イシガイ科の淡水産二枚貝。日本全土のほか中国・朝鮮などに分布し、沼・池などの泥の深い所にすむ。殻長一〇センチ以。形はカラスガイに似ている。表面は光沢のある黒色で殻頂部は浸食されて白くなる。内面は白色で虹色に輝く真珠光沢がある。幼貝の表面はオリーブ色で放射状のすじがある。地方変異が多く、ヌマガイも本種の一型と考えられる。地方によっては食用にする。*和漢三才図会=四七「蚌〈略〉井(ドブ)貝〈止布加伊〉蚌之小者溝河泥中有」之大二三寸殻薄其肉味有二腥気一不一可一食」 ②貝「からすがい(烏貝)」の異名。*大和本草=一四「蚌 からすがひ、とぶがひ、並江州の方言なり。琵琶湖にあり。長七八寸あり」*和漢三才図会=四七「蚌 ながたかい ドブカイ」 方言からすがい(烏貝)。《どぶがい》富山県430 近江106 滋賀県蒲生郡622 大阪638 《どぶかい》佐渡142 発音トブガイ〈標〉フ

どぶ-かき 〔名〕溶かした鉱石をかきまぜるための道具。*日本山海名物図会=一・金山諸道具「どぶかき」

どぶかっ-ちり 【丼礑】 狂言。各流。盲人が師匠の勾当を背負って川を渡ろうとすると、来合わせた目明きが代わりに背負われて渡る。目明きはさらにいたずらを重ね、二人を争わせる。「どぶかっちり」は、深さをはかるために川に投げた石の音。 発音〈標〉カ

どぶ-がめ 【溝亀】〔名〕「すっぽん(鼈)」の異名。 発音ドブガメ〈標〉〇

どぶ-がわ …がは 【溝川】〔名〕(「どぶかわ」とも)どぶ水の流れる川。どぶのようにきたない川。*煤煙〈森田草平〉九「小石川と本郷との高台から落す悪水を溜めて、其処に溜川(ドブカハ)が流れる」*今年竹〈里見弴〉伸び行く五「右側は溝川(ドブガハ)に挟まれた小道」 発音ドブガワ〈標〉〇

どぶ-きげん 〔名〕濁醪(どぶろく)に酔って、機嫌(きげん)のよいこと。*雑俳・川柳評万句合=明和七・義五「軽井沢どぶ機嫌にて行くところ」 発音ドブキゲン〈標〉エ

とふ-ぎょ 【杜父魚】〔名〕魚「かじか(鰍)」の漢名。《季・冬》*俳諧・一幅半=上・秋「鳴声をきけば喰れぬ杜父魚(トフギョ)哉〈一口〉」

と-ふく 【屠腹】〔名〕腹を切ること。切腹。割腹。*地方官会議日誌=一五・明治八年七月八日「旧時の政府は擅ままに屠腹を命じたる程の圧制なれば」*東巡録〈金井之恭〉九・祭祀「終に逼られて屠腹し、曩に追賞に与る」 発音〈標〉〇 会〈〇〉

どぶ-く 【胴服】〔名〕 方言①子どもを負う時にはおるどてらのような衣類。ねんねこ。飛騨539 ②どてら。三重県南牟婁郡西山615

とふく-ちゃ 【十服茶】〔名〕 ゆじっぷくちゃ(十服茶)

どぶくりょう …ブクリャウ 【土茯苓】〔名〕サンキライの塊根の称。乾燥したものを梅毒の薬に用いる。*書言字考節用集=六「土茯苓 ドブクレウ 今云山帰来也」*大和本草=六「土茯苓 さんきらい 〈略〉国俗是を山帰来と云。能悪瘡を治す。茶を忌む。菝葜(かめいはら)を土茯苓と云は非なり」*薬品手引草「土茯苓 ドブクレウ 山帰来(さんきらい)かてぐさ。唐あまかは広東色うす赤き物佳也」 発音ドブクリョー〈標〉フ 古辞書書言

と-ぶくろ 【戸袋】〔名〕雨戸を引き入れるために、端に設けたかこい。*俳諧・桜川=春二「戸袋に風を入をけいゑさくら〈一雪〉」*浮世草子・好色一代男=七・六「真木の戸袋(トフクロ)に立しのぶを」*浄瑠璃・重井筒=中「しのびくるよその恋かとうら山しく、見れば雨戸のとぶくろを、そっとふまへる足もともふるひ」 発音〈会まる〉トビクラ・トンブクロ〔和歌山県〕トブクラ〔紀州・和歌山県・熊本分布相〕トボクラ・トボクロ〔熊本分布相〕トボコロ〔千葉〕〈標〉フ〇〇 会〈〇〉ト

と-ぶくろ 【砥袋】〔名〕 方言草刈りなどの時に砥石を入れて行く袋。砥石入れ。長野県北安曇郡016 岐阜県大野郡丹生川539 静岡県駿東郡552 三重県一志郡604

と-ふ-けん 【都府県】〔名〕都(東京都)、府(大阪府・京都府)と四三の県。 発音〈標〉カ フ

と-ぶさ 【鳥総・朶】〔名〕①葉の茂った木の枝。木末。*堀河百首=夏「卯花も神のひもろぎときてけりとふさもたゆにゆふかけて見ゆ〈源俊頼〉」*色葉字類抄「朶 トフサ」*八雲御抄=三「梢 とぶさ。こずゑ。うれ〈木草の末也〉。うればなどいふ也」*光悦本謡曲・右近「とふさにかけり、雲にうたひ」*俳諧・七柏集=贈蓼太先生「木の葉交にとぶさひらめく牛飲〉水縄に霜の古寺とりはらひ〈虚舟〉」 ②(①の誤用)羽交(はがい)。つばさ。*浄瑠璃・義経新高館・軍配団「裾を払へばひらりと飛ぶ電光稲妻蝶鳥の、とぶさを立る如くにて」 方言大木を切る時にその頂上を切って樹霊をまつるために地に插した枝。新潟県東蒲原郡西川411 古辞書色葉・和玉

とぶさ 立つ 昔、木を切り倒した時、その枝を、切り倒した木の株の上や地上に插して山の神、樹霊に奉る。→鳥総立(とぶさたつ)。*万葉=三・三九一「鳥総立(とぶさたて)足柄山に船木伐り木に伐り行きつあたら船木を〈満誓〉」*万葉=一七・四〇二六「登夫佐多氐(トブサタテ)船木伐るといふ能登の嶋山 今日見れば木立も繁しも幾代神びそ〈大伴家持〉」*八雲御抄=四「とぶさは鳥総とかけり〈略〉是はいづれも木の梢也。杣に入て木を切ては、かならず木のすゑをきりて、切たる木の跡に立也」

とふ-ざい 【塗布剤】〔名〕①医薬物を水、アルコール、エーテル、グリセリン、植物油などに溶解または混和し、皮膚に塗布して用いるようにした外用剤。硼砂グリセリン液・チンク油の類。 ②虫害などで傷ついた樹木の傷面に塗布し、治療と防虫に役立てる薬剤。 発音〈標〉〇 フ

どぶ-ざけ 〔名〕「どぶろく(濁醪)」に同じ。*洒落本・辰巳之園「『先(まづ)気直しに、ひとつお上りなんし』『爰(ここ)の、どぶ酒が、くらわれるものか』」*戦争〈北川冬彦〉戦争・萎びた筒「二人は肩を組んで泡盛・ドブ酒・享楽亭といふデコデコの看板の出てゐる露地に這入って行った」 方言富山県437 石川県河北郡050 福井県大飯郡476 岐阜県山県郡・愛知県名古屋050 滋賀県蒲生郡622 広島県高田郡755 山口県762 愛媛県周桑郡830 長崎県927 熊本県938 《どぶさけ》新潟県岩船郡412 富山県東礪波郡050 伊賀003 長崎県南高来郡千々石925 《どぶさ》長野県西筑摩郡532 京都府竹野郡626 兵庫県美方郡熊次(山詞)016 奈良県661

とぶさ-たつ 【鳥総立】地名 地名「足柄山」にかかる。「万葉=三」の「とぶさ立て足柄山に船木伐り」の歌の意味がわからなくなって、枕詞と誤認して用いたもの。*壬二集「霞わけねにゆく鳥もとぶさたつあしがら山をこへぞくれぬる」

とぶさ-まつ 【鳥総松】〔名〕新年の門松を取り去った後の穴に、その松の一枝を立てておくもの。《季・新年》*新樹〈水原秋桜子〉「鳥総松枯野の犬が来てねむる」*長子〈中村草田男〉「宵の灯に赤き灯もあり鳥総(トブサ)松」

どぶ-さらい …さらひ 【溝渡】〔名〕どぶの底をさらって掃除すること。また、その人夫。*雪中梅〈末広鉄腸〉上・四「此の節では溝渡(ドブサラヒ)が八ヶ間敷から、家を持ってゐても割に合ふ話しではない」*二人女房〈尾崎紅葉〉中・一「下水渡(ドブサラヒ)の高の溜助と腐り合ひ」 発音〈標〉サ 会〈〇〉サ

どぶ-さ-る 【伏・臥】〔自ラ四〕(「と」は接頭語)横になる、眠る意をののしっていう。どぶす。*浄瑠璃・河内国姥火=三「如何なる故と尋ぬれば、奇特や寐ずに戻るを待ってか、のらの姉めはど臥(ブ)さったであらうの」*歌舞伎・幼稚子敵討=口明「其眠たさ。寒ふは有り、勝手はぐうぐうどぶさってけつかる」*洒落本・遊婦里会談「労症をやむ雉子をみるやうに、けんけんして、どぶさる所は、狼のひいばばアほど、鼾をかくといふこった」*滑稽本・浮世床=初・下「今時分はどぶさっ居(て)る最中(せへちう)だらう」 方言寝ることを卑しめていう。「ぐずぐず言わずに早くどぶされ」千葉県君津郡274 長野県下伊那郡533 岐阜県535 愛知県名古屋569 《どぐさる》石川県鹿島郡440 《どふせる》富山県婦負郡八尾050 発音〈標〉サ

と-ふし 【戸節】〔名〕戸の節穴。*読本・南総里見八犬伝=四・三六回「或は戸に耳をよせ、或は戸節(トフシ)よりさし覗けば」 発音〈標〉フ

どぶ-しじみ 【土負蜆・溝蜆】〔名〕ドブシジミ科の淡水産二枚貝。北海道から九州の泥の多い河川や池沼にすむ。殻長一〇ミリ以、殻高八ミリ以、殻幅六ミリ以の丸みのある小形の貝。殻は薄く、表面は淡灰色または淡灰褐色で光沢があり、内面は青白色。胎生で

幼貝は外鰓(がいさい)の中で成長する。利用価値はない。 発音〈標アク〉シ

どぶ-じる 【名】 葱(ねぎ)、味噌(みそ)、魚肉をまぜて汁にした料理。どぶ煮汁。*浜荻-庄内「粕入の汁をどぶ汁」 方言①味噌汁。兵庫県赤穂郡652 広島県高田郡755 ②粕入りの汁。庄内†18

どぶ-じん 【土府神】「どぶ(土府)」に同じ。

どぶ-す 【名】 方言①たまり水。宮崎県西臼杵郡960 ②下水。石川県金沢039(どぶせき)青森県弘前113

どぶ-す 【伏・臥】【自サ四】(「ど」は接頭語)「どぶさる(伏)」に同じ。*雑俳・浦浪集「足の出る蜊・鱁にさされてどぶいとる」 方言寝ることをいやしめていう。「早くどぶせ」青森県南津軽郡115 福島県南部173 神奈川県中郡289 静岡県磐田郡568 発音〈標アク〉ブ

と-ぶすま 【戸襖】【名】 建具の一つ。板戸の表側に紙または布を張って襖のようにしたもの。*浮世草子・好色万金丹-五・四「無地の戸襖(トブスマ)の脇に掛けたる暖簾の下より、三斑の小猫の珠数をそばへて」 発音〈標アク〉ブ

どぶ-ずり 【溝摺】【名】(墨摺りに使う墨汁は、特有の異臭があるところからいう)墨摺り、また、その摺師をいやしめていうことば。

と-ぶせ 【戸伏】【名】窃盗のため、土塀の裾や土台の下などを掘って忍び入ることをいう、盗人仲間の隠語。 隠語輯覧

どぶ-そうじ ：サウヂ【溝掃除】【名】「どぶさらい(溝浚)」に同じ。 発音ドブソージ〈標アク〉ソ〈京アク〉ソ

どぶ-た 【名】 方言泥田。湿田。長崎県南高来郡926(どぶった)埼玉県830 神奈川県藤沢288 静岡県志太郡561

どぶだな 【溷店・溝店】江戸、浅草新寺町(台東区元浅草二丁目)付近の地の俗称。寺町で「どぶだなのお祖師様」と俗称された長遠寺や、その他の寺の門前は、江戸中期から末期にかけて私娼窟として知られた。どぶ。*洒落本・婦美車紫虧-下品中生之部「浅草どぶ店 チョンノマ半 平家 此浄土、髪衣類直助におなじ。人がら少し次なり」*洒落本・狐竇這入-五「溝店(ドブダナ)とやらのお祖師さまへ願がけにいきなんした」*雑俳・柳多留-一〇四「とぶ店の囲ひあひるで見た女」

どぶ-たん 【名】 方言溝。下水。熊本県阿蘇郡938(どぶったま)長野県南佐久郡044

と-ぶつ 【吐物】【名】 胃中、口中から吐いたもの。*波〈山本有三〉子・二・七「黒い吐物(トブツ)はコーヒー様嘔吐といって、最も危険の症状だといった」 発音〈標アク〉ト

と-ぶつ 【堵物】【名】(「あとぶつ(阿堵物)」の略)金銭。*吾輩は猫である〈夏目漱石〉二「嚢中には四五枚の堵物もある」 発音〈標アク〉ト

と-ぶつ 【賭物】【名】 勝負事に賭(か)ける物。かけもの。 発音〈標アク〉ト

ど-ぶつ 【土仏】【名】①土製の仏像。特に、布袋(ほてい)の像をいう場合が多い。*日葡辞書"Dobut(ドブツ)。ツチボトケ」*談義本・古朽木-二「仏像と名が付くからは、銅像木像石仏、土仏(ドブツ)練物玉細工」*歌舞伎・舛鯉滝白旗「閻魔小兵衛-大切「どうでも仏が土仏(ドブツ)のせるか、豪気に重たい」 ②(形動)(布袋の土像に似ているところから)みにくく肥え太っていること。また、そのさま。多く、太った女性についていう。*浄瑠璃・和田合戦女舞鶴-二「土仏(ドブツ)の内儀も大力と聞たに違ひいかいめろめろ」*黄表紙・拝寿仁王参「おえこ、肥吉とて、どぶつに肥った女芸者二人」*歌舞伎・蔦紅葉宇都谷峠(文彌殺し)-三幕「もし大阪の肥ったお方え」『いやも、その肥ったお方は置いて貰ひたいな』『そんなら、どぶつなお人かね』」 方言肥満した人。江戸†18 山口県豊浦郡豊東769 発音〈標アク〉ト〈京〉ト

ど-ぶつ 【土物】【名】 その土地に産する物。土産(どさん)。*泰西国法論〈津田真道訳〉二「其は例ば土物を貢せしめ行軍の車馬を供せしめ」*書経-酒誥「惟土物愛、厥心臧」 発音〈標アク〉ト

どぶっ-かわ ：かは【溝川】【名】「どぶかわ(溝川)」の変化した語。*洒落本・比翼紫-一「近江の湖の泉水、大井川をどぶっ川とおもっている」 発音〈標アク〉〇

どぶ-つ・く 【自カ四】 水などがたまってゆれ動く。*日葡辞書"Dobutçuqi, u, uita(ドブツク)〈訳〉水、酒などが器の中で動く」*坑夫〈夏目漱石〉「いくら銅山でも水に漬かってゐては、仕事が出来る筈がない。かうどぶ附ツ)く以上は、何か変事でもあるか、又は廃坑へでも連れ込まれたに違ひない」

どぶ-づけ 【名】(「どぶつけ」とも)ぬかみそ漬けのこと。どぼづけ。*洒落本・富賀川拝見-山本屋の段「あとでゆるりとむだなのどぶ漬(ツケ)」*洒落本・辰巳婦言-四つ明の部「べちゃアねェとぶ漬(ツケ)きうりの輪切へどらやきをくっつけたやふだ」*俚言集覧「どぶ漬 糠味噌漬の事」*四季漬物塩嘉言「糠味噌漬 又、酴醾(ドブ)漬ともいふ」 方言①米のとぎ水に塩を入れた漬け物。伊豆大島波浮港304 ②一夜漬け。福井県大飯郡476 ③ぬかみそ漬け。群馬県勢多郡233 埼玉県秩父242 千葉県274 神奈川県高座郡287 伊豆三宅島308 新潟県中頸城郡427 富山県東礪波郡437 長野県上伊那郡530 岐阜県535 静岡県島田562 愛知県名古屋050 上方281 三重県610 和歌山県676 島根県那賀郡723 広島県高田郡755 香川県824 愛媛県830 佐賀県唐津916(どぶつけ)茨城県稲敷郡204 千葉県250 島根県鹿足郡724 福岡県博多906(どぶ)山梨県南巨摩郡512 静岡県川根560 伊勢003 発音〈標アク〉〇 〈京アク〉〇

とぶつ-けいやく 【賭物契約】【名】 未来または未定の事柄に関する予想に当事者間で互いに財物を賭(か)ける契約。 発音トブツケイヤク〈標アク〉ケ

どぶつ-げじょ ：ゲヂョ【土仏下女】【名】 肥え太った婦人をあざけっていう語。*雑俳・川柳評万句合-明和四・礼九「さぞ出すであろうとなぶるとぶつ下女」*雑俳・柳多留-五「どぶつ下女目をなくなしておかしがり」

どぶっ-ぱた 【溝端】【名】(「どぶはた」の変化した語)どぶやみぞの縁(ふち)。*滑稽本・浮世風呂-四・上「其足で溝端(ドブッパタ)に在た四十貫目ほどの礫(いしころ)を打付(ぶっつけ)たが」*滑稽本・浮世床-二・下「おれをば娘の方の端へ廻してくれと、わざわざ溝端(ドブッパタ)をあるいて格子の前へ往かかる」 発音〈標アク〉〇

どぶつ-やき 【土仏焼】【名】 江戸時代、正徳(一七一一～一六)の頃、伊勢国桑名郡播磨村字土仏(三重県桑名市播磨)で、藩主の命により焼いた陶器。その質は、唐津焼に似ていたという。 発音〈標アク〉〇

どぶ-づり 【名】(「どぶ」は淵のこと)釣りで、流れのゆるい深い淵を重いおもりを用いて毛針を沈めて釣る釣り。多く、鮎釣りで行なわれる。 発音〈標アク〉〇

ドブ-テーリング 【名】(英dovetailing)木工家具の接合方法の一つ。接合部分を鳩の尾のように切り込んで、互いにはめ込む方法をいう。

どぶ-ど-い 【太】【形ロ】(「ど」は接頭語)ばかに太い。たいそう太い。*浄瑠璃・木下陰狭間合戦-九「どぶといきせる横ぐわへ」 方言①非常に太い。三重県尾鷲604 ②図太い。ずうずうしい。三重県尾鷲604 滋賀県蒲生郡622 大阪638 徳島県美馬郡809 発音〈標アク〉ト

どぶ-どぶ 【副】(「と」を伴って用いることもある)液体が揺れ動いてたてる音、また、そのさまを表わす語。*虎寛本狂言・丼礑「早うつげ。心得ました。どぶどぶ、ちょろちょろ。ハヤ御座らぬ」*日葡辞書"Dobudobuto(ドブドブト)〈訳〉揺り動かされて、酒、または水が音を立てるさま」*仮名草子・可笑記-五「或はいさぎよきいづみにももすそかいくり、どぶどぶととび入りて」*坑夫〈夏目漱石〉「時にどぶどぶ動く水が急に膝迄減った」 方言泥などの中に足を踏み入れて歩くさま。岩手県気仙郡132 壱岐934 発音〈標アク〉ト

とぶ-とり 【飛鳥】【連語】空を飛び行く鳥。空をかける鳥。ひちょう。*古事記-下「奴理能美が養(か)ふ虫、一度は鹵ふ虫に為り、一度は鼓に為り、一度は飛鳥(とぶとり)に為りて、三色(くさ)に変る奇(あや)しき虫有り」*書紀-継体八年正月(前田本訓)「飛鳥天之鳥(トフトリ)も児(おのかこ)を愛養(うつくしふ)と為て樹(き)鱁(すゑ)に擇を作(く)ふ」 発音〈標アク〉〇 〈京アク〉〇

とぶとり 跡(あと)**を濁さず**[=**濁すな**] 立ち去る者は、あとが見苦しくないように始末すべきである。立つ鳥跡を濁さず。*ゆく雲〈樋口一葉〉上「夫れ等を然るべく御取まとめ、飛鳥(トブトリ)もあとを濁(ニ)ごすなに候へば」

とぶとり の 献立(こんだて) まだ捕えてもいない鳥の料理の仕方を考えるの意から、早計もはなはだしいたとえ。捕らぬ狸の皮算用。*俚言集覧「飛鳥の献立」

とぶとり 懐(ふところ)**に入るときは狩人**(かりゅうど)**も助くる** 追いつめられて逃げ場を失ったものが救いを求めにくる場合には、助けてやるのが人の道であるというたとえ。窮鳥懐に入れば猟師も殺さず。*浄瑠璃・出世景清-二「たとへば日本に唐を添へて給はるとて、そもや訴人が成るべきか、とぶ鳥ふところに入時はかりうどもたすくるとよ」

とぶとり=も[=**までも**]**落つ** 飛鳥も地上に落ちてくるほどに、権勢のさかんなことのたとえ。飛ぶ鳥を落とす。*平治-上・信頼信西不快の事「飛ぶ鳥も落ち、草木もなびくばかり也」*浄瑠璃・出世景清-二「平家の御代にて候はば誰があらふ景清と、とぶ鳥迄もおちし身が、今此御世にて候へばこそ」*歌舞伎・四十七石忠矢計-二幕「殊には此の辺の組屋敷中の頭役をも勤められ、第一内福で飛鳥(トブトリ)落(オ)ちる当時の勢ひ」

とぶとり を 落とす 「とぶとり(飛鳥)も落つ」に同じ。*雑俳・柳多留-一一「官女の時も飛鳥をおとすなり」*歌舞伎・善悪両面児手柏(妲妃のお百)-五幕返し「飛(ト)ぶ鳥(トリ)落(オト)す勢に、なって悪事を那須野ヶ原」*火の柱〈木下尚江〉四「当時海軍で飛ぶ鳥落とす松島を立腹させちゃア大変だから」

とぶとり-なかま 【飛鳥仲間】【名】 飛ぶ鳥も落ちるほどの威勢のさかんな人々。*浮世草子・傾城色三味線-京・三「色里はゐんつうにてはのきく事一しほ、大臣の威勢も飛鳥仲間(トブトリナカマ)とて、上京に卸こあげの者はやづかひ」

とぶとり-の 【飛鳥】【枕】①地名「明日香(あすか)」にかかる。天武天皇の時代、赤雉の瑞祥にちなんで、年号を「朱鳥(あかみとり)」と改元するとともに、その宮殿「浄御原宮(きよみはらのみや)」を「飛鳥浄御原宮」と呼ぶようにしたので、その所在地の「明日香」の地にも冠せられるようになったもの。*万葉-一・七八「飛鳥(とぶとりの)明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ〈作者未詳〉」*風雅・恋二・一〇四二「いくゆふべむなしき空にとふ鳥のあすかならすと又や頼まん〈後伏見院〉」 ②飛ぶ鳥のように早くの意で、「早く」にかかる。*万葉-六・九七一「冬こもり 春さりゆかば 飛鳥乃(とぶとりノ) 早く来まさね〈高橋虫麻呂〉」 補注(1)①の用法の例は「飛鳥」という表記なので、「とぶとり」と訓む説もある。(2)①の用法から、地名「あすか」の表記に、この「飛鳥」の文字がそのまま用いられるようにもなった。(3)「万葉-一四・三三八一」の「夏麻(なつそ)びくうなひ

をさして等夫登利乃(トブトリノ)至らむとそよ我が下はへし〈東歌・武蔵〉は、「至る」にかかる序の一部として用いられている。

どぶ-どろ【溝泥】〔名〕下水の底にたまっている泥。どぶから浚(さら)ひ上たる小溝泥(ドブドロ)の中へばったり転り込み」*にごりえ〈樋口一葉〉六「下は行水きたなき溝泥(ドブドロ)なり」 発音〈標ア〉◎ 〈京ア〉◎

どぶ-にじる〔名〕「どぶじる」に同じ。*料理集「雁鴨等生鳥の汁どぶ煮汁と云事あり」

ど-ぶね〔名〕昭和の初期頃、新潟県刈羽郡から石川県内灘村あたりまでの沿岸、また、瀬戸内海で活躍した漁船。大小さまざまで形も一定していない。日本海のものは重木(おもき)を船材に用いたことに共通点がある。瀬戸内海では生簀(いけす)船を称したり、また、石炭を運搬する船を称することもあった。

どぶ-ねずみ【溝鼠】〔名〕①ネズミ科の大形の家ネズミ。体長二〇センチぐらいで、尾は体長よりやや短い。体の上面は褐色で下面は白色、ときに全身黒色や白色のものもある。雑食性で、どぶや下水道を通路とし、人家の台所に現われる。ペスト菌を媒介することがある。アジア中央部の原産だが、現在ではほとんど世界中に分布する。しちろうねずみ。*吾輩は猫である〈夏目漱石〉五「彼れらが若しどぶ鼠であるならば」 ②(①の体色から)黒ずんだねずみ色。こいねずみ。*洒落本・青楼惚多手買一「どぶ鼠のもめんぶとりのきものの上に」*洒落本・船頭深話一「衣装付はみへねどどぶねづみの火事羽織に」 ③主人の目をかすめて悪事を働く使用人。*別れ霜〈樋口一葉〉二「番頭の白鼠去年生国へ帰りし後は十露盤玉と筆先に帳尻つくろふ溝鼠(ドブネズミ)のみ成けん」 発音〈標ア〉◎ 〈京ア〉◎

とぶ-ひ【飛火・烽・燧】〔名〕古代、海外からの外敵侵入に備えて設置された非常警報用の施設。また、そこで行なう急を知らせる合図。昼は煙をあげ、夜は火を焚いて合図とした。また、その任に当たる者をさしていうこともある。天智天皇称制三年(六六四)白村江で敗れ朝鮮半島より撤退したときに初めて九州におかれ、沿岸から大宰府に、大宰府から瀬戸内海沿岸の烽台を経て京に連絡した。令の規定では四〇里(現在の四里二八町強)ごとにおき、住民のうちから烽長一人、烽子四人を任命して常時見張らせた。任期三年で烽長は課役を、烽子は徭役を免除された。延暦一八年(七九九)大宰府管内を除き停廃。のち、出雲国、隠岐国に作られた。烽(ほう)。烽燧(ほうすい)。*書紀-天智三年是歳(北野本訓)「対馬嶋、壱岐嶋、筑紫国等に防と烽(トフヒ)を置く」*令義解「軍防・烽昼夜条「凡烽、昼夜分・時候望。若須・放・烽者、昼放・烟、夜放・火」*十巻本和名抄「四「烽燧 火橛附説文云烽燧〈峯遂二音度布比〉辺有警則挙之 唐式云諸置燧之処置火台々上插橛〈音厥俗云保久之〉」*猿投本文選正安四年点、燧(トフヒ)を挙けて、鼓を伐って」*浄瑠璃・頼光跡目論一四「四方を遙かに見給へば、優に妙なる御遊び、心も爰に須磨の浦、とぶひの昔あらわれて、光源氏の大将は」 古辞書和名・色葉・名義・和玉・伊京・天正・黒本・易林・書言

とぶひ-の【飛火野】奈良市、春日山のふもと、春日野の一部。また、春日野の別称。元明天皇のころに烽火台が置かれたところから名づけられた。*枕一一六九・野は「野は嵯峨野さらなり。印南野。交野。駒野。とぶひの」 発音〈標ア〉◎ 古辞書文明・書言

とぶひの野守(のもり) 飛火野の番人。*古今一春上・一九「春日野のとぶひののもり出でて見よ今いくかありて若菜摘みてんへよみ人しらず」*金槐集一春「春日野のとぶひののもりけふとても昔かたみに若菜つむらむ」

と-ぶみ【外文】〔名〕令制で、外印(げいん)すなわち太政官印を捺して発行する公文書。太政官符や六位以下の位記などをいう。↔内文(うちぶみ)。*本朝世紀-長保四年一一月二九日「着庁、覧三内文一并行三外文請印一」

どぶ-みず…みづ【溝水】〔名〕下水の中の汚水。せせなぎ。*いさなとり〈幸田露伴〉五七「溝水(ドブミヅ)掬(むす)んで撓(そそ)ぎかけ」 発音〈標ア〉◎

どぶ-め・く〔自ヵ四〕器の中で、水・酒などがゆれる(日葡辞書)。

どぶ-や【溝屋】〔名〕溝摺(どぶず)りを業とする人。

どぶら〔名〕(落ちる時の音から)雪の中に穴をあけて人を落とすいたずらを、秋田県から新潟県にかけていう。

とぶらい とぶらひ【弔】〔名〕(動詞「とぶらう(弔)」の連用形の名詞化) ①「とむらい(弔)①」に同じ。*古今一哀傷・八三七・詞書「藤原忠房が、昔あひしりて侍りける人の身まかりける時に、とぶらひにつかはすとてよめる」*源氏一葵「所々の御とぶらひのつかひなどたちこみたれど、えきこえつがず」 ②弔問をする人。また、弔問をするための使い。*書紀-皇極元年正月(図書寮本訓)「百済の国、天皇崩りましぬと聞りて弔使(トフラヒ)を奉遣(たてまた)せり」 ③「とむらい(弔)②」に同じ。*狭衣物語一三「後の世のとぶらひにだにとて、かく籠り侍るなり」*曾我物語一二・奈良の勤操僧正の事「その後、かの僧正の夢に、御とぶらひにより即ち蛇身を転じて仏道を成ずと見えたり」*日葡辞書「Toburai(トブライ)〈訳〉葬儀、または供養、または死者のためにするその他の儀式」 ④「とむらい(弔)③」に同じ。*二人女房〈尾崎紅葉〉下・五「私を城井の門から葬式(トブラヒ)を出す事か」*黒潮〈徳富蘆花〉一・一二・一「姉の葬式(トブラヒ)なら姉が死んだ後の事ですね」 発音〈全まり〉トボライ(静岡) 〈標ア〉◎ 〈京ア〉◎

とぶらい とぶらひ【訪】〔名〕(動詞「とぶらう(訪)」の連用形の名詞化) ①訪問すること。訪問。見舞い。*竹取「是をかくや姫聞てとぶらひにやる歌」*蜻蛉一中・天禄二年「そのくれて、又の日、なましぞくたつ人、とぶらひにものしたり」*源氏一若紫「ここに侍りながら、御とぶらひにもまでざりけるに」*山家集一中「院の小侍従、例ならぬ事大事に伏し沈みて年月経にけりときこえて、とぶらひにまかりたりけるに」*東寺百合文書ち・応安三年月日・最勝光院方評定引付(大日本古文書五・三)「当年内裏御仏事為晴儀之間、為出仕、別可為御訪之間、頻申之、仍二貫文借書出之畢」 ②訪問・見舞いなどのための贈り物。また、謝礼のための贈り物。進物。*源氏一藤裏葉「うち、東宮よりはじめ奉りて、六条院などよりも、御とぶらひども、所せきまで御心寄せ」*苔の衣一「所々の御とぶらひさまざまなる中に、大納言殿よりは、ことに心ありて見ゆる」*東寺百合文書ち・応安一一年一一月二〇日・最勝光院方評定引付(大日本古文書五・二〇)「就其使者下向之間、路次辛苦無是非之由令申候、仍一結分訪に可遣之由、衆儀畢」 ③世話すること。案内すること。*源氏一御法「いまはかのくらきみちのとぶらひにだにたのみ申べきを」 発音〈標ア〉◎

とぶらい-いくさ とぶらひ:【弔戦】〔名〕「とむらいがっせん(弔合戦)」に同じ。*浄瑠璃・吉野都女楠一かちぢの御幸「幼心に只一騎、とぶらひ軍思ひ立」*浄瑠璃・国性爺合戦一「我君のとぶらひ軍」 発音〈標ア〉◎ イ²

とぶらい-い・ず とぶらひいづ【訪出】〔他ダ下二〕さがしだしておとずれる。*源氏一蓬生「風のつてにても、我かくいみじき有様を聞きつけ給はば、必ずとぶらひいで給ひてん」*源氏一玉鬘「九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひいでて」

とぶらい-じょう とぶらひジャウ【弔状】〔名〕人の死をいたむ書状。*書簡故実「吊状之事不封事、定たる法にはあらず」

とぶらい-もと・む とぶらひ:【訪求】〔他マ下二〕たずねさがす。さがしもとめる。*書紀-神代下(鴨脚本訓)「已に鈎を海の中に失ひて訪獲(トフラヒモトムル)に因(よし)無し」*竹取「長者のあたりに、とぶらひもとめんになき物ならば」*法華義疏長保四年点一「今仏世尊入于三昧といは、第二に釈疑の人を訪覓(トフラヒモトムル)なり」

とぶらい-わた・る とぶらひ:【弔渡】〔他ラ四〕人の死をいたみ、その喪にある人を慰め続ける。*あさぢが露「御息所はかなくかくれ給ぬれば、あとの哀れをもしのびきこえとぶらひわたり給に」

とぶらい-わた・る とぶらひ:【訪渡】〔他ラ四〕①訪問や見舞いのために来る。*夜の寝覚一四「今は老のつもりの常の事となりにて侍を、聞きおどろきとぶらひわたられたる人々侍るをだに」 ②訪問や見舞いにおとずれ続ける。

とぶら-う とぶらふ【弔】〔他ハ四〕(「とむらう(弔)」の古形) ①「とむらう(弔)①」に同じ。*伊勢物語一〇「やんごとなき女のもとに、なくなりにけるをとぶらふやうにていひやりける」*源氏一紅葉賀「かの御法事などし給ふにもいかめしうとぶらひきこえ給へり」 ②「とむらう(弔)②」に同じ。*成尋母集「残りて世にあらむ人、これを見て略ず功徳になるべからむことをとぶらふべきなり」*今昔一七・二七「夜は専に法花経を読誦し奉て、父の後世を訪(とぶら)ふ」*太平記一一一・金剛山寄手等被誅事「面々の尸骸便宜の寺々に送られ、後世菩提をぞ被訪ける」 ③「とむらう(弔)③」に同じ。 発音〈文〉トブローとも 〈標ア〉 ヲ(回) 〈京ア〉◎ 古辞書色葉・名義・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・易林・書言

とぶら-う とぶらふ【訪】〔他ハ四〕①問う。問いたずねる。質問する。*書紀-欽明一六年二月(寛文版訓)「俄(しばらく)蘇我の臣問訊(トフラフ)て曰はく聖王妙(たへ)に天の道地(つ)の理を達(さとと)て」*古今一秋上・二〇二「秋の野に人松虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはんへよみ人しらず」*大唐西域記巻十二平安中期点「親ら梵学を承けて哲人に宿の疑ひを訪(トフラフ)ノル ハカル」 ②訪ねる。訪問する。会いに行く。*古今一雑下・九八二「わが庵は三輪の山本恋ひしくはとぶらひきませ杉立てる門へよみ人しらず」*源氏一若紫「こ按察の大納言の家に侍りて、もののたよりにとぶらひて侍りしかば」 ③安否を問う。見舞う。*書紀-推古一六年九月(岩崎本訓)「爰に天皇唐の帝を聘(トフラ)ひたまふ」*水戸本丙日本紀私記一応神「欲定省 止不良波牟止於毛布(トフラハむとおもふ)」*枕一九・うへにさぶらふ御猫は「なぞの犬のかく久しう鳴くにかあらんと聞くに、よろづの犬とぶらひみにいく」*源氏一夕顔「大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり」*栄花一浦々の別「女院より様々にこまかに推しはかりとぶらひ聞えさせ給へり」*日蓮遺文一新尼御前御返事「時々とぶらう人は昔なれし同法也」 ④さがし、調べる。調査する。*平家一一・祇園精舎「遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山」 発音〈文〉トブローとも 〈標ア〉 ヲ(回) 〈京ア〉◎ 古辞書色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

とぶら-う 〔動〕 方 言 傷などを悪くする。徳島県美馬郡809 壱岐「ひびとぶろうて手をはらした」934

とぶり 〔副〕(多く「と」を伴って用いる)物がうまくはまりこむさまを表わす語。*中華若木詩抄一中「戸の枢を、上へから木を以て、をとし入て、とぶりと合ふ心也」

どぶり 〔副〕(多く「と」を伴って用いる)重い物など

が水中に落ちこむ音、水が揺れ動いたり、ぶつかったりする音、また、そういう様子を表わす語。どぶん。*名語記-三「水におちいるをとのとぶとなる如何。とふは井の中に石をかきて、とふりとよませたり、つよはむの反は、とふ也」*雑俳・冠独歩行「またゆくか・女郎の井筒身はどぶり」*男五人〈真山青果〉三「ドブリと汐先の寄せるたびに、船がゆれて」 発音〈標〉ア 〔ア〕

ドーフリース (Hugo De Vries ユーゴー) オランダの植物学者。植物生理学から出発し、オオマツヨイグサの雑種研究の成果として突然変異説を提唱、遺伝学にすぐれた貢献をなした。(一八四八～一九三五) 発音〈標〉ア 〔リ〕

どぶる 『動』 方言 雪道や泥など〈足を踏み込む。「たんぼの中へどぶった」〈新潟県長岡〉418

どーぶる・い 【古】〔形口〕(「ど」は接頭語) 古いのをあざけっていう。古くさい。*浄瑠璃・善光寺御堂供養-二「伍子胥が呉王を諫言の古ひ格、どぶるひどぶるひ」

とぶる・う とぶる4【訪】〔他ハ四〕「とぶらう(訪)」の変化した語。*地蔵十輪経元慶七年点-二「咸く共に疇(ひと)しく咨(トブルヒ)諸の王の務を理む」 発音〈標〉ア 〔ア〕

ドブルジャ (Dobrudja) 黒海西岸の地方名。ドナウ川の下流域を占める。北部はルーマニア、南部はブルガリアに含まれ、古代、民族大移動の通路となった。 発音〈標〉ア 〔ア〕

どーぶろ 【土風炉】〔名〕茶席で、湯をわかすための、土で焼いた風炉。奈良が原産地で、奈良風炉、また奈良火鉢ともいう。武野紹鷗好みに始まる。*随筆・本朝世事談綺正誤「黒赤の二品あり。土風呂なり」*茶道筌蹄二-「風炉「土風呂は金風呂より後なり」*俚言集覧(増)土風炉 奈良をもととす」 発音〈標〉ア 〔ア〕

ドーブロイ (Louis Victor De Broglie ルイ=ビクトル) フランスの理論物理学者。電子の性質に関して粒子性と波動性とを融合させた物質波の概念を提唱、シュレディンガーの波動力学の先駆となった。一九二九年ノーベル物理学賞を受賞。一八九二年生。 発音〈標〉ア 〔ア〕

とふーろう 【都府楼】 筑前国(福岡県)に設置された大宰府の政庁の別名。また、政庁正面の大門の高楼。福岡県筑紫郡太宰府町に遺跡がある。*菅家後集-不出門「都府楼纔看瓦色、観音寺只聴鐘声」 発音〈標〉ア 〔ア〕

どぶろく 【濁醪・濁酒】〔名〕蒸した米に、こうじと水を加えて醸造しただけの、滓(かす)をこし取らないままの白色のどろりとしたにごり酒。どぶろく。どぶろくしゅ。もろみざけ。もろみ。しろうま。どぶ。どぶ。《季・秋》*仮名草子・昨日は今日の物語-下「酒の名も所によりてかはりけり伊勢屋の酒はよそのどぶろく」*俳諧・類船集-為「印地〈略〉深草祭はどぶろくきげんにて帰さに七条河原に出向ひ」*物類称呼-三「松岡氏どぶろくは濁醪(だくろう)の転語〈略〉関東にてはどぶろくともにごりざけ共いふ」*まぼろし〈国木田独歩〉「白馬(トブロク)とは違ひますよ」 語源説 (1)ダクラウ(濁醪)の転訛〔松屋筆記・梅園日記・和訓栞・大言海〕。(2)トビロク(酸醪・緑)の転訛〔類聚名物考〕。 発音〈なまり〉ドブルグ・ドベ・ドベコ〔岩手〕 〔ア〕

ドブロリューボフ (Nikolaj Aljeksandrovič Dobroljubov ニコライ=アレクサンドロビチ―) ロシアの文芸批評家。革命的民主主義の立場から文学作品を分析、雑誌「現代人」に啓蒙的な評論を多く発表。チェルヌイシェフスキーとともに、ベリンスキーの後継者と目される。主著「オブローモフ主義とはなにか」。(一八三六～六一) 発音〈標〉リョ 〔リョ〕

どーふん 【土墳】〔名〕土を小高く盛り上げた墓。塚。土饅頭。*太平記-二一・先帝崩御事「土墳(トフン)数尺の草、一径涙尽きて愁へいまだ尽きず」*夏侯湛-大暑賦「土墳地坼、谷枯川竭」 発音〈標〉ア 〔ア〕

どぶん 〔副〕(多く「と」を伴って用いる) 重い物などが水中に落ちたり、水中に飛び込んだりする音、また、そのさまを表わす語。どぶり。どぼん。*塩原多助一代記〈三遊亭円朝〉一五「前なるお茶の水の二番河岸へ逆とんぼを打ち、ゴロゴロゴロどぶんと、陥りましたゆゑ」*俳諧師〈高浜虚子〉四八「左の腕を洗ったばかりでドブンと湯槽の中につかって」 発音〈標〉ア 〔ア〕

とふん-しょう ：シャウ【吐糞症】〔名〕(腸管が閉塞して大便が排出されないで口から糞臭を帯びた内容物をはきだすところから)「ちょうへいそく(腸閉塞)」の異称。 発音トフンショー 〔ア〕

とぶん-ちょう ：テウ【吐蚊鳥】〔名〕鳥「よたか(夜鷹)」の異名。*俳諧・類船集-加「吐蚊鳥(トブンチャウ)といふ鳥は鳴ことにその口より蚊を吐出すとかや」*薬品手引草「吐蚊鳥(トブンテウ)ぶんもうてう」

とぶん-とぶん 〔副〕(「と」を伴って用いることもある) 入れ物の中の水が、揺れてたてる軽い音を表わす語。*石川五右衛門の生立〈上司小剣〉四「其の瓶子を振ってみると、酒か水か、トブントブンと音がした」 発音〈標〉ア 〔ア〕

とへ 〔名〕窃盗をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

とへ 〔名〕隠すことをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

とべ 【砥部】 愛媛県中央部の地名。松山市の南隣にある。ミカン・カキ・ナシの栽培や磁器の砥部焼で知られる。 発音〈標〉ア 〔ア〕

とべ 【戸部】 姓氏の一つ。 発音〈標〉ア 〔ア〕

とへ 〔接尾〕 上代、人名の下に付けて用いる。敬称か。男女ともに用いる。とめ。*古事記-中「次に日子坐王、山代の荏名津比売、亦の名は苅幡(かりはた)戸弁(トベ)に娶して」*御巫本日本紀私記-神代上「級長戸辺 之奈加止倍(しなかトヘ)」 語源説 トベ(所統)の義。また、戸スベ、処部の義ともいう〔日本語源=賀茂百樹〕。

どへ 〔名〕 方言 おくび。げっぷ。長崎県五島崎山936

どへ 〔名〕 方言 (どひゅ)鹿児島県肝属郡高山979

どへ 〔名〕 方言 まぬけ者。ぼんやり者。岩手県気仙郡132 秋田県仙北郡西明寺159

どべ 〔名〕 方言 ①肥満した者。でぶ。富山県婦負郡435 愛媛県松山832 ②七福神の一つ。布袋。富山県430 ③肥満した者の腹。富山県射水郡434 ④おたまじゃくし(御玉杓子)。富山県東礪波郡城端438 (どべらんこ) 岐阜県郡上郡福田541 ⑤男子の陰部。隠岐725 ⑥くらげ(水母)。山口県柳井771 ⑦虚言。うそ。徳島県三好郡辻804 ⑧無精者。飛騨539 ⑨泥のたまった所。泥地。宮城県栗原郡鶯沢141 ⑩沼地。沼。長野県西筑摩郡532 兵庫県佐用郡650 ⑪きたない水たまり。溝。福島県安積郡039 大分市959 ⑫泥。宮城県登米郡142 秋田県154 群馬県山田郡234 新潟県佐渡403 富山県430 石川県羽咋郡440 丹波163 鳥取県西伯郡708 島根県714 岡山県734 広島県751 山口県769 高知県幡多郡昭和844 福岡県粕屋郡900 ⑬海底の泥。大分県宇佐郡長洲958 ⑭下肥。秋田県仙北郡大曲033

どべ 〔名〕 方言 順位の最下位。びり。福井県459 長野県上伊那郡530 岐阜県545 静岡県563 愛知県579 三重県602 兵庫県佐用郡650 奈良県669 鳥取県西伯郡汗入708 島根県邑智郡722 広島県沼隈郡757 山口県771 香川県818 愛媛県831 福岡県900 熊本県945 大分県959

どーべ 【土辺】〔名〕地の上。地べた。*歌舞伎・今源氏六十帖-二「これ女中、見れば地下(ドベ)に蒲団を敷き、夜着を着て寝給ふは合点がいかぬ」*浄瑠璃・新版歌祭文(お染久松)座摩社「あいたあいた土辺(ドベ)に尻餅」*歌舞伎・敵討天下茶屋聚-三幕「サアこの通り土べに手を突いて詫言して居るから」

とーへい 【斗柄】 北斗七星のひしゃくの柄の部分をいう。すなわち、大熊座のエプシロン・ゼータ・エータの三星。古代からこれのさす方向で時刻や季節を判別した。*本朝文粋-五・小一条左大臣辞右大臣第一表〈菅原文時〉「星官照暁、徒備二斗柄之員」*国語-周語下「昔武王伐殷、歳在二鶉火一、月在二析木之津一、辰在二斗柄一」 発音トヘイ 〔ア〕

とべい 【名】 方言 ①稲などを積んだもの。稲むら。熊本県上益城郡白糸955 ②稲などを積んだ上におおう雨よけの藁。肥後菊池郡495

と-べい 【斗米】〔名〕一斗の米。わずかの米。また、わずかな俸禄・給料。五斗米。*菅家文草-三・重答「今朝幸軟慇懃問、扶杖帰時斗米提」*浮世草子・好色万金丹-二・二「斗米(トベイ)三銭の値は、むべ瑞穂の国の徳をあらはし」*思出の記〈徳富蘆花〉三・一七「伯父の〈略〉顔を見ると、何だか斗米肉十斤の老廉頗(ろうれんば)を見るやうに、妙に物悲しい感も起るのであった」*史記-趙奢伝「廉頗為之、一飯斗米 肉十斤、被甲上馬、以示二尚可用」 発音トベイ 〔ア〕

と-べい 【渡米】〔名〕米国へ渡航すること。アメリカへ行くこと。*鎌倉夫人〈国木田独歩〉上「彼人の渡米(トベイ)の目的は」*或る女〈有島武郎〉前・一四「親類縁者に促されて、心にもない渡米を余儀なくされた時に」 発音トベイ 〔ア〕

どーへい 【土兵】〔名〕土着の兵。その土地で徴用した兵士。*日本外史-二・源氏正記「頼朝騎睡而後、夜過二森山駅一土兵聚、且捕之」*読本・椿説弓張月-前・一一回「俄頃(にはか)に三百人の土兵(ドヘイ)を催し集め」*西国立志編〈中村正直訳〉八・二〇「一千八百五十七年五月榜葛喇(ベンゴール)の土兵将吏に叛き」*元史-兵志二鎮戍「寧国徽州初用二土兵一、後皆与」賊通、今尽遷二之江北」 発音ドヘイ 〔ア〕

どーへい 【帑幣】〔名〕かねぐらの金銀財貨。 発音ドヘイ 〔ア〕

どーべい 【土塀】〔名〕土で作った塀。*日葡辞書「Dofei(ドヘイ)。ッチノ ヘイ」*吾輩は猫である〈夏目漱石〉四「土塀へ圧し付けられた時の顔」*珊瑚集〈永井荷風訳〉仏蘭西の小都会「梢そびゆる苦の土塀の長きに伝はり」 発音ドベイ 〔なまり〕ドベ〔大和・讃岐〕ドヘ―〔壱岐〕 〔ア〕 方言 〔ア〕

どへい-あめ 【土平飴】〔名〕明和(一七六四～七二)の頃、土平屋という者が江戸町中を売り歩いた飴。どへいがあめ。*西落本・当世風俗通-跋「我金錦先生、参二考当世風俗、輯為二一帙一、略〈余一見而喀〉之。猶二土平飴(ドヘイアメ)之悦一」*俚言集覧「土平飴 明和の頃江戸町中を土平(どべ)やといへる飴売あるきしよし老人いへり、その売声ドヘイ」

どへい-が-あめ 【土平飴】〔名〕「どへいあめ(土平飴)」に同じ。*談義本・興談浮世袋-四・近江八景江戸名所争の事「どへいが飴に子供を寄すれば、太鼓坊主に人足を留む」*西落本・当世爰かしこ「海道湯漬は茶で喰はせ、土平が飴はうたで売る」

とべい-かんゆう ：クヮンイウ 【斗米官遊】〔名〕斗米(わずかな給料)を得るために官吏となり、故郷を遠く離れて勤めること。*巡査〈国木田独歩〉「斗米官遊(トベイクヮンイウ)未だ非を悟らず」

どべ-うち 【名】 方言 ①田植の終わりの日に互いの体に泥の塗り合いをすること。山口県阿武郡見島768 ②屋根ふきの時に屋根土を上と下とで投げ合うこと。長崎県五島932

どーべき 【土壁】〔名〕土塗りの壁。つちかべ。*日葡辞書「Dofeqi(ドヘキ)。ッチカベ」*宋九嘉-題寿安煙霞亭詩「粧鑾土壁紅千点、界画銀沙緑一鈎」 発音〈標〉ア 〔ア〕

どべ-くそ 〔名〕 方言 最後。一番あと。びり。岐阜県

大垣535 愛知県知多郡587《どべっかす》長野県上伊那郡530

どべーくるま【名】①厚い円板の両輪を付けた、幅が狭くて長い荷車。大阪の市中で用いた。*随筆・守貞漫稿=三三「輪厚き板を以てし、又品物を架する所にも板を釘す輪、牛車よりは小く、架幅狭くして長さ牛車に倍す、是道路狭が故に如此也。俗其名をどべ車と云」 ②あずき餅をいう、大工仲間の語。*新ばん普請方おどけ替詞「あづき餅ヲ、どべ車」

どべーこつ【名】方言最後。一番あと。びり。岐阜県稲葉郡535 愛知県知多郡569 愛媛県周桑郡831 福岡県博多906《どべこす》熊本県937

どべーざけ【名】方言酒の粕を水に溶かした飲料。青森県南部地方111《どべ》岩手県131

どべーそ【名】方言でべそ。三重県尾鷲604 愛媛県松山832 熊本県天草島954

どべた【土辺太】【名】盗品を隠すこと、犯罪証拠物件を湮滅(いんめつ)することをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

どべーた【名】方言①深田。泥田。長野県521 山口県762《どべった》長野県諏訪524 ②ぬかるみ。長野県東筑摩郡523

どべーた【名】方言地面。じべた。「どべたをはだしで歩く」岡山県743 備後774 山口県771 愛媛県周桑郡831

どべーた【形動】方言物事の手ぎわのへたなさま。へたくそ。長野県西筑摩郡532 滋賀県彦根619《どへたくそ》岐阜県大垣535

どべーつく【動】方言ぬるぬるしてべとつく。壱岐934 熊本県「うなぎはどべつく」937

とべっーた【連体】方言とび離れた。懸隔した。岐阜市535 愛知県知多郡589

どべっつい…べっつひ【土竈】【名】土でつくったかまど。*福翁自伝<福沢諭吉>王政維新「土竈(ドベッツイ)を拵へて飯を焚いて居る者もある」 発音〈標ア〉〈ス〉

とへつーもーない【連語】方言途方もない。とんでもない。「とへつもない大きな魚」尾張熱田759 美濃535 尾張569《とべつもない》福島県北会津郡182《とべつもない》青森県三戸郡五戸118

どべーどころ【名】隠匿(いんとく)場所をいう、盗人仲間の語。*浄瑠璃・契情小倉の色紙=三文字屋「遠(とう)から忍んで、どべ所もはって置た」

どべーどべ 方言 ■【名】道などの悪い所。ぬかるみ。岐阜県海津郡535 広島県高田郡755 福岡県博多906 ■【副】①泥などのさま。ぬかるみなどのさま。べたべた。ぬるぬる。高知県土佐郡846 壱岐934 ②不誠実で責任のがれなどをするさま。徳島県美馬郡809

とべーやき【砥部焼】【名】愛媛県伊予郡砥部町を中心とした一帯でつくり出される磁器。江戸後期に始まる。*愛媛面影=四・伊予砥(古事類苑・産業一三)「近世此の山より掘出す石をもて陶器を製し、諸国に商ふ事夥し、俗に砥部焼と名く」*青春<小栗風葉>夏・一三「銀瓶を取揚げ、戸部焼(トベヤキ)の急須(きふす)に湯を注がうと為て」 発音〈標ア〉〈ロ〉

とべら【名】①トベラ科の常緑低木。関東以西の本州、四国、九州の海岸に生え、また庭木としても栽植される。幹はよく枝を分け、こんもりと茂り、高さ二〜三㍍になる。葉は枝の上部に集中してつき、長さ五〜一〇センチ㍍の倒卵形。光沢がある革質で、縁は少し裏にそりかえる。初夏、芳香のある径一センチ㍍内外の白色、のちに黄変する五弁花を開く。花は枝頂にややまばらに集まって集散花序となる。果実は指頭大で短毛を密布し、熟すと三裂して赤い粘った種子を出す。節分に枝を扉にはさんで鬼をよける風習から「とびらのき」といい、和名は、その略という。漢名、海桐。とべらのき。*日葡辞書「Tobera(トベラ)」*大和本草諸品図=上「とべら 除夕に国俗此木の枝を扉に挟みて来年疫鬼のふせぎとす。故にとひらの木と云。葉は臭味共にあしし。花の香よし、葉の中の筋は白し」*日本植物名彙<松村任三>「トベラ 海桐花」 ②植物「しゃくなげ(石南花)」の異名。*康頼本草=本草本部下品之集「石南 味辛苦平有毒。和止扁良。二月四月採葉。八月採子」 発音〈標ア〉〈ロ〉

とべら の 花(はな) トベラの花。枝頂に集まり集散花序をつくる。五〜六月頃咲く。萼片は緑色で毛が多い。花弁は楕円形でふつう五枚、やや肉厚で、白色だがのちに黄変する。雄しべは五本、雌しべは一個で子房は白色。《季・夏》

とべら の 実(み) トベラの種子のこと。赤く粘着性の物質におおわれ光沢がある。一一〜一月に熟す。《季・秋》*白圭集<尾山篤二郎>「くれなゐに割れてねばねばし海桐(トベラ)の実指もて触るれば指ねばつくも」

とべらーか…クヮ【名】双子葉植物の一科。世界に九属二百余種あり熱帯を中心に分布し、特にオーストラリアには八属が固有である。高木または低木、時につる性。葉は互生し、常緑で、普通、托葉はない。靭皮の外側に多量の樹脂を含む。花は両性、放射相称。萼、花冠、雄しべは五数性で、子房は上位、二〜三個の心皮が一または多室を作り、各室に多数の胚珠がある。果実は蒴果、または液果。日本では暖かい地方の海岸にトベラが自生している。 発音〈標ア〉〈ロ〉

とべらーぐさ【名】方言植物、どくだみ(蕺)。佐賀県044《とべら》宮崎県西諸県郡・鹿児島県974

どべらこい【形】方言狡猾(こうかつ)である。ずるい。こすっからい。香川県高松050 愛媛県北宇和郡津島838

とべらーのーき【名】植物「とべら」に同じ。*書言字考節用集=六「石檀 トベラノキ」*本朝食鑑=九「鯨<略>白屑風瘡 用二登部羅(トヘラノ)木煎濃汁一」*桐の花<北原白秋>植物園小品「日の光は形円きトベラノキに遮られて空気冷やかに風うすく」 古語書書言

とべらーやき【名】トベラの木を燃料として、節分の豆を煎(い)ること。トベラには臭気があり、戸にさして鬼を防ぐなど種々の呪法に使われた。

トペリウス(Sakari Topelius サカリー) フィンランドの詩人、小説家。愛国的な歴史小説と多くの児童読物で知られる。作品は小説「軍医物語」、詩集「荒野の花」、童話「子どもの読物」「星のひとみ」など。(一八一八〜九八) 発音〈標ア〉〈リ〉

と・べる【他バ下一】かくすことをいう、盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕

どべる【動】方言①すべる。「静かに行かぬとどべるぞ」長崎県平戸920《とべる》徳島県祖谷809 高知県844 ②太る。肥満する。「どべとる奴」愛媛県松山832

とーへん【斗辺】【名】北斗星の辺。*俳諧・鶉衣=続・中・一四九・巴雀・木児三吟十二表長歌行の奥書「今の菜刀のひかりあらたまりて、紫気の斗辺を射るべきもいさしるべからず」

とーへん【杜騙】【名】人にだまされないようにすること。転じて、人をだますこと。かたり。*読本・椿説弓張月・後・序「高間太郎、剪径(せんけい)にあらず杜騙(トヘン)にあらず二代の忠臣万夫の驍勇跡を鴈回に埋め人を鵜渡に惹り」*読本・椿説弓張月・続・四三回「操節(みさほ)正しき母公(ははごさへ、杜騙(トヘン)残毒なる老婆に殺されて、胎内の子をとられ」

どへん【名】①巡礼・遍路をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕 ②乞食をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

どーへん【土偏】【名】漢字の偏の一つ。「地」「垣」「城」などの「土」の部分をいう。この偏を持つ字の大部分は、字典で土部に属する。つちへん。*徒然草=一三六「しほと云ふ文字は、いづれの偏にか侍らんと問はれたりけるに、土偏に候と申したりければ」*運歩色葉「土 トヘン」 発音〈標ア〉〈ロ〉

どーべん【土弁・土辯】【名】土地ことば。土地なまり。土語。*鳥影<石川啄木>九・一「聞苦しい土弁(ドベン)の川狩の話も興を覚えぬ」 発音〈標ア〉〈ロ〉

どーへんくつ【名】方言ねじけ者。偏屈者。奈良県664《どへん》滋賀県彦根619

どへんーと【副】方言①土地の大きくぼんでいるさま。「昨日の雨でどへんと大きな穴があいた」岩手県気仙郡132 秋田県鹿角郡156《どへっと》岩手県気仙郡133 ②物の多いさま。岐阜県本巣郡545

とーほ【徒歩】【名】乗物に乗らないで歩くこと。かち。かちあるき。*日本外史=四・源氏後記「麾二従者一徒歩而帰」*改正増補和英語林集成「Toho トホ 徒歩」*鶏<森鷗外>「おい。今日は徒歩(トホ)かい」*戦国策・齊策四「今夫士之高者、乃称二匹夫一、徒歩而処二農畝一」 発音〈標ア〉〈ト〉〈宗ア〉〈ロ〉

とーほ【杜甫】中国盛唐の詩人。字(あざな)は子美。少陵と号し、工部、老杜などと呼ばれる。晉の杜預を遠祖とし、祖父は初唐の詩人杜審言。中年には安祿山の乱に会って幽閉されるなど波乱の生涯を送った。「兵車行」「北征」「秋興」など多くの名作を残し、その詩風は写実的で力強く、沈痛の風趣があり、日本でも西行や芭蕉などの旅の詩人が尊び愛唱した。後世、詩聖と呼ばれ、李白とともに李杜と並び称される。詩文集に「杜工部集」。(七一二〜七七〇)

とほ【副】(多く「と」を伴って用いる)「とほん」に同じ。*仮名草子・可笑記=五「いたづらにひとりとほとをる事をすき好むか、或は昼寝なんどをすきこのむ人又世におほし」

とーぼ【斗棒】【名】「とぼう(斗棒)」の変化した語。*破戒<島崎藤村>一七・三「地主は『とぼ』(丸棒)を取って桝の上を平に撫で量った」 方言①穀物を量る時に枡を平らにならす棒。新潟県中頸城郡427 富山県437 愛媛県827 ②かき餅を作るための細長い餅。富山県東礪波郡鷹栖437

どぼ【名】芸妓・仲居などをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

どぼ【名】方言①花の蕾(つぼみ)。石川県鹿島郡447 ②おたまじゃくし(御玉杓子)。三重県志摩郡和具044 ③魚、かじか(鰍)。徳島県804《とぼ》近江駒井村706《とほ》備前706《どぼうず》備前および美作706

とほーあくはつ【吐哺握髪】【名】(「吐哺」は口の中にあるものをはき出す、「握髪」は髪の毛を握るの意。周公が、訪れる者があれば食事中や洗髪中でも、口中のものをはき出し、あるいは洗いかけの髪の毛を握って、即座に出迎えたという「韓詩外伝・巻三」の故事から)政務にたずさわる者が人の意見を重んじ施政に心を砕くこと。また、すぐれた人間を失うのを恐れることのたとえ。 発音〈標ア〉〈ト〉〈ロ〉

とぼーいわい【斗棒祝】【名】方言八八歳の祝。米寿の賀。熊本県938 大分市959

とーほう…ハウ【途方・十方】【名】①方向。めあて。あてど。方針。 ②方法。手段。すべ。*宇津保・蔵開中「わが君をわびさせたてまつるぬす人のやからは、あたのたはぶれにたはぶれて、とほうのずきゃうぶみささげもちてまどひくるぞ」*高野山文書=応永三三年一一月二五日・鞆淵彦太郎去状案(大日本古文書五・七五六)「ことさらくわんかくゐんのかちし、ほほくなり候間、みのとほうなく候」*宗祇初心抄「よき連歌をせんとあんじて、其間に人にこされ候へば、いよいよとはうなくなりて、一面をする事大事候」*文明本節用集「十方 トハウ 或作斗方一戸方。途方。此字説甚多」*浄瑠璃・丹波与作待夜の小室節=夢路のこま「年よって子を先だて、途方(トハウ)があるまいとしぼや」 ③すじみち。道理。*日葡辞書「Tofô-gu(トハウヲ) ワキマエヌ ヒトヂャ」*鑑草=一「遠

慮を忘れ図方(トハウ)なくて、いふまじき事をもいひ」 発音トホー 〈標ア〉〇 〈余ア〉〇 吉辞書文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林

とほう に 暮れる 手段が尽きてぼんやりする。どうしてよいか手段に迷う。*虎寛本狂言・武悪「とかく某は、途方にくれて分別に能はぬに依って」*浮世草子・武家義理物語一・五「式部十方(トハウ)にくれて、暫く思案しすまして」*黄表紙・敵討義女英一下「敵にはあらずして小しゅんが首なりければ、途方(トハウ)にくれてゐたりける」

とほう も ない ①どうしてよいか手段に迷う。途方にくれる。とほうない。*中華若木詩抄一上「葬らんと思て、北原へ、つれてはゆけども、なにとも、とはうもない也」 ②さっぱり道理に合わない。また、ある物事の程度などが、他とひどくかけはなれている。とんでもない。とてつもない。*咄本・鹿の巻筆一・四「さてとほうもない事をいふ人じゃ」*浄瑠璃・傾城反魂香一上「虎と云獣が日本へ出た例なし。十方(トホウ)もないこと、夜盗押し入りの手引きか」*滑稽本・東海道中膝栗毛一初「イヤアおまいは、とほうもないお人だ」 発音(今まで)トオナイ〔大阪〕トームネー・トホームネー〔豊後〕トッケムナイ・トッケムネー・トッケモナイ・トッケモネー・トヒョウモナイ〔福岡〕トッペッモネェー〔茨城〕トハモナエ〔島根〕

とほう を 失う どうしてよいか手段に迷う。途方に暮れる。*太平記一一〇・鎌倉兵火事「猛火の下より源氏の兵乱入て、度(ト)方を失へる敵共を此彼に射伏切臥」*人情本・春色梅美婦禰四・二二回「種々すれど便(たより)なく途方をうしなふばかりなり」 吉辞書易林・書言

とーほう ：ハフ【徒法】〔名〕すぐれたものであるが実際には行なわれない法令。実行しがたい法令。無益な法律、法則、しきたり。*明六雑誌一六号・出板自由ならんことを望む論〈津田真道〉「其実は有名無実の徒法なるに似たり」*開化本論〈吉岡徳明〉下・九「国君躬ら五穀豊熟を禱るが如きは皆徒法なり」*孟子一離婁上「徒善不ㇾ足ニ以為ㇾ政、徒法不ㇾ能ニ以自行ㇾ」 発音トホー 〈標ア〉〇

とほう トハウ【土芳】〔江戸前期の俳人〕 ⇨はっとりとほう(服部土芳)

とぼう とぼう【蜻蛉】〔名〕(歴史的かなづかいは一説に「とばふ」とも) 昆虫「とんぼ(蜻蛉)」に同じ。*袖中抄一一七「あきつはとは、とばうと云虫のうすき羽と云也」*易林本節用集「蜻蜓 トハフ」 補注「とうぼう・とんぼう」の略ともいうが、「疑問仮名遣」に説くように、よく飛ぶところから、「飛ぶ」に接尾語「ふ」の付いた「飛ばふ」の名詞化で、「とうぼう・とんぼう」は、これに「う」音の添わったものと考えることもできる。 吉辞書易林

とぼう 〔名〕 方言①家の入口。茨城県204 群馬県219 埼玉県241 下総050 伊豆八丈島310 八丈島†35 〔八丈実記〕新潟県南魚沼郡422 ②戸。茨城県稲敷郡204 〈とぼ〉栃木県河内郡211 ③家の入口をはいった所の土間。福島県南会津郡檜枝岐195

とーぼう 【斗棒】〔名〕①穀物を量る時に枡を平らにならす棒。枡掻き。とぼ。 ②(①と形が似ているところから) 新潟県で道祖神祭(さえのかみまつり)に用いる祝棒の一種。白膠木(ぬるで)などの木を用いることが多く、削りかけをつけたりして、腰にさしたり、手に持ったりする。粥杖。祝棒。*随筆・北越雪譜二・二「少し富家の童これをなすには楠木(ぬるでのき)を上下より削り掛て鍔の形を作る、これを斗棒(トボウ)といふ」 方言穀物を量る時に枡を平らにならす棒。北海道†11 石川県金沢440 兵庫県明石郡656

とーぼう 【図謀】〔名〕はかりごとをめぐらすこと。*自由之理〈中村正直訳〉三「人民をして、居家日用の事、便利に生活するを得、好き情形を得せしめ、大事大利を図謀し」 発音トボー 〈標ア〉〇

とーぼう 【妬媚・妬媚】〔名〕(「妬」は妻が夫をねたむこと。「媚」は夫が妻をねたむこと) 夫婦が互いに嫉妬し合うこと。*玉石志林一四「男女雑処すれ共、淫事を醸し妬媚を起すの原となることなしと云ふ意」*史記一黥布伝賛「妬媚生ㇾ患、竟以滅ㇾ国」

どーぼう 【土崩】〔名〕土がくずれるように、物事がだんだんくずれていって、ついには支えることができないようになること。*明六雑誌一一四号・リボルチーの説続〈箕作麟祥〉「羅馬の形勢終に土崩に帰し復た収拾する能はず」*近世紀聞〈染崎延房〉四・三「殆ど瓦解土崩(トホウ)の色を顕し」*史記一主父偃伝「天下之患、在ニ于土崩一、不ㇾ在ニ于瓦解一、古今一也」 発音トホー 〈標ア〉〇

どーぼう 【土蜂】〔名〕①土中に巣を作る蜂。あなばち。ゆするばち。つちばち。*十巻本和名抄一八「土蜂 爾雅注云土蜂〈由須流波遅〉大蜂之在地中作房者也」*重訂本草綱目啓蒙一三五・卵生「土蜂 ユスルバチ〔和名鈔〕、ツチバチ、ツチスガリ 南部、アナバチ、一名地籠〔南寧府志〕」 ②似我蜂(じがばち)のこと。*本草和名「蠮螉 一名土蜂〈蘇敬注云土蜂 非蠮螉也〉一名蜾蠃 一名細腰 和名佐曽利」 発音トホー 〈標ア〉〇

どぼう 〔名〕 方言①着物のぼろ。福岡県三潴郡900 ②食用にならないきのこ。石見713

とぼう-がえり とぼうがへり【蜻蛉返】〔名〕「とんぼがえり(蜻蛉返)③」に同じ。*平家一四・橋合戦「くもで・かくなは・十文字・とばうかへり・水車(みずくるま)、八方すかさずきったりけり」

どぼう-がかい ：グッカイ【土崩瓦解】〔名〕土がくずれ、瓦(かわら)が破れる意から、根底からくずれ破れて手のつけようのないさまにたとえていう。*明六雑誌一三号・民撰議院設立建言書之評〈森有礼〉「土崩瓦解の形勢」*郵便報知新聞一明治九年一一月一三日「土崩瓦解の予防を計らんとす」*史記一始皇本紀「秦之積衰、天下土崩瓦解、雖ㇾ有ニ周旦之材、無ㇾ所ニ復陳ニ其巧ㇾ」 発音ドホーガカイ 〈標ア〉〇

とーぼうじ ：ハウジ【外膀示・外榜示】〔名〕犬追物(いぬおうもの)の円形の馬場で、二重にめぐらした大縄、小縄のうち、外の大縄の区域。*射御拾遺抄「馬場のはうじの事略うちはうじとは縄の事也。外はうじとはとなわの事也」

とほう-とてつ トハウ：【途方途轍】〔名〕すじみち。条理。道理。とひょうとてつ。

とほうとてつ もない さっぱり道理に合わない。また、ある物事の程度などが、他とひどくかけはなれている。とんでもない。とてつもない。とひょうとてつもない。*うもれ木〈樋口一葉〉一「天だ天だと途方途轍(トハウトテツ)もなき八つ当り、的(まと)になる天道さま気の毒なり」

とほうな・い トハウ：【途方無】〔形口〕文 ⇨とほうな・し〔形ク〕どうしてよいか手段に迷うさまである。途方に暮れるさまである。とひょうない。とほうもない。*評判記・色道大鏡一五「差別をしらず、作法をうかがはねば、万事十方(トホウ)なきが故に、友をたづね」*随筆・嬉遊笑覧一九「細川幽斎の心得を書たる中に道筋不案内にて俄の時十方なきものにて候云々」 発音トホーナイ 〈標ア〉ナ

とほう-なげくび トハウ：【途方投首】〔名〕(形容詞「とほうない」の語幹に接尾語「げ」の付いた「途方無げ」に、「投げ首」をいいかけた語) 途方にくれて思案すること。*浄瑠璃・唐船噺今国性爺一下「心のせくまま無分別してのけたととはうなげ首忙然たり」

とほうなし トハウ：【途方無】〔名〕途方もないこと。どうしようもないこと。また、その人。とひょうなし。*浄瑠璃・心中宵庚申一中「お千世殿めでたい、去られて戻らしゃったげなと、口も気ままのとはうなし」 発音トホーナシ 〈標ア〉ナ

とほう-に 【途方】〔副〕 方言はなはだしく。山口県阿武郡766 長崎市「とほうに寒うなったのう」927

どーぼえる 〔動〕 方言泣く。泣きわめく。岐阜県稲葉郡535 山口県大島772

とぼ-かし・い 〔形口〕不確実である(日葡辞書)。

トボガン 〔名〕(英 tobogan) 木製のそりの一種。また、それによるスピード競技。鋼製そりによるボブスレーとならんで冬季オリンピックの種目になっている。正式名称はリュージュ。

とほ-きょうそう ：キャウサウ【徒歩競争】〔名〕陸上競技の競歩競技のこと。 発音トホキョーソー 〈標ア〉キ

と-ぼく 【杜牧】中国晩唐の詩人。字(あざな)は牧之(ぼくし)。号は樊川(はんせん)。杜佑の孫。感傷と頹廃の色濃い詩風で、絶句にすぐれ、杜甫の老杜に対し小杜と呼ばれる。「樊川集」がある。(八〇三～八五二)

どーぼく 【土木】〔名〕(古くは「とぼく」とも) ①土と木。*浄瑠璃・曽我扇八景一上「内に土木の気をやしなひて、外青黄の色なく」*近世紀聞〈染崎延房〉四・二「貴族のおん身にて土木(ドボク)と共に朽果んとは」 ②土や木を使っての工事。木材、鉄材、土石などを使って建物、道路などをつくる工事。土木工事。*権記一長保四年三月一九日「仍営造之間、重制過差、不費土木之功力、可減柱梁之高大」*兵範記一久安五年一〇月二五日「去夏企ニ土木、其功速終、今日被ㇾ遂ニ供養ㇾ」*色葉字類抄「土木 伎芸 トボク 工匠分 又造作名也」 発音〈標ア〉下 〈余ア〉下〇 吉辞書色葉

どーぼく 【奴僕】〔名〕男の召使。下男。ぬぼく。*重右衛門の最後〈田山花袋〉五「奴僕(ドボク)らしい三十前後の顔の汚い男が」 発音〈標ア〉下 〈余ア〉下

どぼく-がく 【土木学】〔名〕土木工事に関する問題を研究する学問。 発音ドボクガク 〈標ア〉ク1

どぼく-ぎょう ：ゲフ【土木業】〔名〕土木工事に関係のある職業。 発音ドボクギョー 〈標ア〉ク 〈余ア〉ク

どぼく-こうがく 【土木工学】〔名〕道路・河川・港湾・上下水道や国土開発、都市計画などの施設に関する土木技術上の問題を研究する工学の一部門。 発音ドボクコーガク 〈標ア〉コ 〈余ア〉コ

どぼく-こうじ 【土木工事】〔名〕土石、木材、鉄材などを使ってする道路、河川などの工事。*内務省官制(明治三一年)七条「本省直轄の土木工事に関する事項」 発音ドボクコージ 〈標ア〉コ 〈余ア〉コ

とぼ-ぐち 〔名〕(「とぼくち」とも) 家などの出入り口。かどぐち。表口。とばくち。*雑俳・川柳評万句合一明和五・天二「とぼロもまし塩をする商売や」*滑稽本・浮世風呂二・二・下「とぼロ(グチ)をまたぐか早(はゑ)へ、大(で)へ(ン)の字に踏(ふん)ぞべって」*歌舞伎・関原神葵葉一序幕「何といっても関東勢は会津どころか、とぼロ(クチ)の白河辺で兜をぬぎ、降参するに違ひござらぬ」 方言福島県浜通173 群馬県047 埼玉県246 千葉県274 佐渡†44 静岡県551 〈とぼくち〉福島県石城郡189 茨城県新治郡201 房総†26 上総003 〈とぼうぐち〉群馬県233 埼玉県秩父郡044 〈とぶぐち〉群馬県佐波郡237 静岡県551

とぼく-の-へん 【土木の変】一四四九年、明の皇帝英宗が、モンゴルのオイラート部の長エセンの軍と河北省の土木堡で戦い、大敗してとらわれた事件。翌年和議が成立、帝は送還された。 発音〈標ア〉下

どぼく-ひ 【土木費】〔名〕土木工事のための費用。 発音〈標ア〉ク 〈余〉ク

とぼけ 【恍・惚】〔名〕(動詞「とぼける(恍)」の連用形の名詞化) とぼけること。また、その人。「おとぼけのうまい人」 方言①ぼんやり者。青森県南津軽郡113 兵庫県美方郡村岡648 宮崎県都城968 ②もうろく。茨城県真壁郡201 発音(今まで)ツボケ〔北海道〕〈標ア〉ク

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈奈ア〉〔〕

とぼけ-がお ：がほ【恍顔】〔名〕とぼけた顔つき。また、そしらぬ顔つき。とぼけづら。*浄瑠璃・日本武尊吾妻鑑-二「名のらせ給へととぼけ顔、しらけて男にあしらへば」*破戒〈島崎藤村〉一七・二「座りもせず、御辞儀もせず、恍(トボ)け顔(ガホ)に立った小娘は」 発音トボケガオ 〈標ア〉〔〕

とぼけ-たおれ ：たふれ【恍倒】〔名〕相手にとぼけられて、どうにもならないこと。*浄瑠璃・心中二つ腹帯-二「しらじらしい空とぼけ、それに嵌ってお千代はの、とぼけ倒(ダフ)れになりました」

とぼけ-づら 【恍面】〔名〕「とぼけがお(恍顔)」に同じ。*滑稽本・八笑人-三下「なんだかいやみったらしいとぼけ面(ヅラ)」 発音〈標ア〉〔〕

とぼけ-もの 【恍者】〔名〕①しらばくれる人。そのことに気づいていないかのようにふるまう人。*日葡辞書「Toboqemono(トボケモノ)〈訳〉いつわりしらばくれる人」 ②滑稽な言動をする人。ひょうきん者。③ぼんやりした人。うっかり者。④年をとってぼけた人。老いぼれた人。 発音〈標ア〉〔〕〔〕

とぼ-ける 【恍・惚】〔自カ下一〕〔文〕とぼ・く〔自カ下二〕①わざとしらないふりをする。そのことに気づいていないようにふるまう。しらばくれる。*文明本節用集「恍 トボクル」*日葡辞書「Toboqe, uru, eta(トボクル)。Toboqeta(トボケタ) コトヲ マウス〈訳〉しらばくれる。いつわる」*歌舞伎・傾城忍術池-三「すりゃ、身共に金子を用達てたと云ふのか、恍(トボ)ける事はないわい」*唐詩選国字解-五言古「此の何王と云は、直に太宗の事なれども略〉直に指ては云はれぬ、それでわざととぼけて云が、詩人の上手と云ものぢゃ」*当世書生気質〈坪内逍遙〉一六「何をなどととぼける可(べ・か)らずッ」 ②滑稽な言動をする。*浮雲〈二葉亭四迷〉三・一八「此方(こちら)で真面目にしてゐるものを、とぼけた顔をし、剽軽な事を云ひ」*門三味線〈斎藤緑雨〉四「とぼけた事を言ひさんな、呉服屋でもなし仕立屋でもなし、何を地蔵様が拵へて呉れるものか」*家〈島崎藤村〉上・八「平素(ふだん)から厳格な姑のやうな人に、そんなトボケた真似が出来るであらうか」 ③ぼんやりする。うっかりする。*浮世草子・好色五人女-二・四「雞とぼけて宵鳴きすれば」 ④年をとって頭の働きが鈍る。ぼける。老いぼれる。もうろくする。*和英語林集成(初版)「Tobokete(トボケテ) ワガコノ カオモ シラヌ」 方言①ぼんやりする。「とぼけると自動車にぶつかるぞ」青森県南津軽郡113 ②気を失う。山口県阿武郡766 ③もうろくする。ぼける。山梨県南巨摩郡奈良田510 長野県上伊那郡高遠048 熊本県上益城郡白糸955 語源説(1)コトホクル〈言惚〉の義〈言元梯・大言海〉。(2)トボケル(乏気留)の義〈紫門和語類集〉。(3)ボケはバカ・ハケ等と同語源で痴愚の状態をいう。トは接頭辞〈神代史の新研究=白鳥庫吉〉。 発音〈今まで〉タバケル 〔伊豆大島〕〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 文『とぼく』〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 古辞書文明・饅頭・黒本・書言

とぼこ 【外架】〔名〕庭にある鷹のとまり木(日葡辞書)。

とぼ-ごころ 【吐哺心】〔名〕為政者が政務にくばる心。↓吐哺握髪(とほあくはつ)。*雑俳・広原海-五「何迚も君周公の吐哺心」

とぼ-さき 【名】(「とぼさき」とも)木の枝の先。こずえ。とぶさ。*和訓栞「とぼさき 俗に木の最(ほ)末などをいへり遠先の義万葉集に遠木(きこ)末といふを最木末とも書るをもて知るべしといへり」*和訓栞「とぶさ 顕昭説に梢をいふといへり。今とぼさきといふに同じ語なるべし」

とぼし 【燈】〔名〕〔動詞「とぼす(点)」の連用形の名詞化〕①火をともして、闇を照らすのに用いるもの。ともし。たいまつ・紙燭(しそく)の類。*女中詞(元禄五年)「おあかし おとぼし 蠟燭」 ②男女の交合。*洒落本・意妓口-二「もしとぼしはなかったかと湯で床(とこ)のやうすを聞いたり」 方言①あかり。燈火。島根県大原郡大東町041 ②たいまつ。琉球197 沖縄050 発音〈標ア〉〔〕〔〕〈奈ア〉〔〕

とぼし 【名】あか色の下等米。*成形図説-一六・粳類「赤米 〈略〉赤物、登凡志、此もの穀の下品なり、とぼしは乏(とぼし)きと通ず」

とぼし 【名】方言田畑の、鳥などをよける物。かかし。長崎県北松浦郡919 五島936 熊本県天草島938

とぼし-あげ 【燈揚】〔名〕盂蘭盆(うらぼん)の最終行事として七月二四日、あるいは三〇日に燈籠の火を消すこと。《季・秋》

とぼし-あぶら 【燈油】〔名〕燈火をともすのに用いる油。古くはイヌガヤの実の油やゴマ油・魚油なども用いたが、のちにもっぱら菜種油を使うようになった。*随筆・嬉遊笑覧-一〇下「古へは蠟燭なくみな燈油を用ゆ」 方言①菜種油。埼玉県秩父242 奈良県669 和歌山市676 《とぼし》栃木県足利214 埼玉県川越246 三重県北牟婁郡・香川県三豊郡044 ②石油。熊本県上益城郡938 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕

とぼし-い 【乏】〔形口〕〔文〕とぼ・し〔形シク〕①足りない。十分でない。*古本説話集-六二「よろづに、とぼしき物、つゆなし」*春鳥集〈蒲原有明〉序「こは自然の富を以て賈(トボ)しとするに似たり」*吾輩は猫である〈夏目漱石〉一一「東風君の様な経験の乏しい青年諸君は、よく僕等の云ふ事を聞いて」 ②ますます。*私聚百因縁集-八・五「仏の物ぞとて聊かも不法なる事は為ざりけり。最(いと)痛く貧(トホシキ)者は誠に返す事を得じと唱ふべきを」*日葡辞書「Toboxij(トボシイ)〈訳〉貧しく、物が欠乏している。つまり貧窮のさま」 Toboxij teide gozaru(トボシイ テイデ ゴザル)〈訳〉貧しく、物が欠乏している。つまり貧窮のさま」 方言①少ない。三重県桑名602 ②頼りない。心細い。愛媛県827 《とぼしない》「ひとりで居ったらとぼしのうなった」岡山県741 ③さびしい。富山県西礪波郡広瀬館437 岐阜県大野郡白川「親に死なれてとぼしいことだ」539 徳島県祖谷809 語源説(1)トホシ(富欲)の義〈言元梯〉。(2)トミホソシの略〈和訓考〉。(3)トフルシ(登旧)の略転〈紫門和語類集〉。(4)タマシキ(偶如)の義のトモシの転〈名言通〉。 発音トボシイ 今まで トモシイ〔紀州〕〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 文『とぼし』〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 古辞書色葉・和玉・文明・饅頭・黒本・書言

とぼし-かけ 【燈掛】〔名〕①使いかけのろうそく。*雑俳・柳多留-五「とぼしかけくれろにしちや聞あきる」 ②すでに男の手がついた女性。*雑俳・柳多留-八七「とぼしかけでもよし盛と申請」

とぼし-がら 【点火茎】〔名〕イネ科の多年草。温・暖帯の各地の林下などに生える。高さ約五〇センチ㍍。叢生する。葉は狭線形で内巻きになり、幅二〜三ミリ㍍。五〜六月頃、桿を伸ばし、卵形で芒(のぎ)のある緑色の小穂を円錐状につける。小花には三個の雄しべがある。*日本植物名彙〈松村任三〉「トボシガラ」 発音トボシガラ 〈標ア〉〔〕

とぼし-かんば 【燈樺】〔名〕方言樹木、うだいかんば(鵜松明樺)。富山県五箇山・石川県能美郡白山・岐阜県023

とぼし-ぐさ 【燈草】〔名〕植物「こひげ(小髭)」の異名。《季・夏》

とぼし-さ 【乏】〔名〕(形容詞「とぼしい」の語幹に接尾語「さ」の付いたもの)足りないこと。また、その度合。*歌舞伎・幼稚子敵討-三「国光の贋物をこしらへ、金弐百両家中を騙り取、とぼしさの騙(かたり)か」 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕

とぼし-た・つ 【燈立】〔自タ下二〕放蕩(ほうとう)する。色にふける。女狂いする。*浄瑠璃・心中二枚絵草紙-中「夜ありき日ありきとぼしたて帰れば小やどでいしゃうをしかへ」

とぼし-てんとう ：テンタウ【十星瓢虫】〔名〕テントウムシ科の甲虫(こうちゅう)。体長六〜九ミリ㍍。体は黄赤褐色で上翅に一〇個の黒色斑があり、前胸背にも黒色斑がある。本州、四国、九州に分布。 発音トホシテントー 〈標ア〉〔〕

とぼし-び 【燈火】〔名〕ともした火。あかり。ともしび。*守護国界主陀羅尼経平安中期点「生盲の燈(トホシヒ)の光を見ぬごとし」*東大寺本大般涅槃経平安後期点「日月と星宿と焜燎(トホシヒ)と燈燭と」 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 古辞書名義・文明・天正・黒本

とぼし-むかい ：むかひ【燈迎】〔名〕暮六つ過ぎ。すなわち午後六時過ぎをいう。*洒落本・船頭深話-一「とぼし迎ときちゃアおッそろしくいそがしい。〈略〉とぼしむかひとはくれ六ッ過なり」*歌舞伎・独道中五十三駅-五幕「似せ迎ひでも、とぼし迎ひでも承知だが、給金はいくらくんなさる」

とぼ-す 【点・燈・燃】〔他サ四〕①あかりをつける。ろうそく、燈心などに点火する。ともす。*守護国界主陀羅尼経平安中期点「夜暗の中に而も大火を然(トホセる)がごとし」*護摩蜜記長元八年点「壇の下の四角に燈台八本を立て燈を燃(トホセ)」*平松家本平家-四・頼政近衛院時変化者射事「其時上下手々に火を燭(トホシ)寄て是を見るに」*中華若木詩抄-上「此の短繁に火をとぼしてをけば」*咄本・聞上手-提灯「てうちんをとぼしてもって出」*浮雲〈二葉亭四迷〉一・四「居間へ這入って手探りで洋燈を点(トボし)」 ②男女が交合する。性交する。*譬喩尽-二「女を犯すことを江戸詞に燃(トボス)といふと」*滑稽本・東海道中膝栗毛-初編「夜があけてもいいはな、おめへ買ってとぼせばいい」*雑俳・柳多留-四七「くらまぎれとぼして見ればおうば殿」 方言燈火をつける。埼玉県入間郡044 東京都江戸川区277 石川県440 山梨県512 岐阜県「提燈とぼす」541 愛知県587 三重県610 滋賀県617 京都府宇治郡635 兵庫県650 奈良県601 和歌山県682 島根県713 岡山県733 広島県751 山口県防府762 徳島県803 福岡県小倉902 鹿児島県978 語源説(2)について)婿と嫁がとぼして来た紙燭をひとつにして寝所の燈としたところから〈海録〉。 発音〈今まで〉トバス 〔壱岐〕〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕 古辞書和玉・文明

どぼ-す 【名】方言①沼。富山県430 ②下水。どぶ。石川県440 ③軒下の雨落場。石川県金沢050

ど-ぼず 【名】方言①僧を卑しんでいう語。坊主。奈良県669 ②剃髪。三重県三重郡富田050 ③子ども。岐阜県本巣郡545

と-ぼそ 【枢・扉】〔名〕(「戸臍(とぼそ)」の意)①戸の梁(はり)と敷居とにうがった小さな穴。これに、枢(とまら)をさし入れて戸を開閉させる軸とする。*正倉院文書-造石山院所用度帳-天平宝字六年閏一二月(大日本古文書一六)「戸齊廿四隻」*十巻本和名抄-三「枢 爾雅云枢〈音朱〉謂之楓〈音隈 度保曽俗云度万良〉孫炎曰門戸之枢也」 ②(①から転じて)戸、扉(とびら)。また、戸口。*小川本願経四分律平安初期点「若戸枢(とボソ)転(まは)らずは、皮を著くること聴す若し上の枢(トホソ)壊れば皮を以て縫(まつ)ふこと聴す」*源氏-若紫「おく山の松の戸ほそをまれに明てまだみぬ花のかほをみるかな」*高野本平家-灌頂・大原御幸「鹿やぶれては霧不断の香をたき、枢(トボソ)おちては月常住の燈をかかぐ」*俳諧・奥の細道-福井「あやしの小屋に、夕貞・へちまのはえかかりて、鶏頭・はは木々に戸ぼそをかくす」 発音〈標ア〉〔〕〈今史〉平安・鎌倉●●○ 室町●●● 〈奈ア〉〔〕 古辞書字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・天正・饅頭・易林・書言

とぼつ-く 【自カ四】まごまごする。まごまごとうろつく。*浄瑠璃・傾城反魂香-上「座頭一人とぼとぼ

と、とぼつく杖をふり上げ、ふり上げ」*浄瑠璃・相模入道千疋犬-四「途(ど)を失ひ、壁に取付柱をいだき、とぼつく所をつっと抜け」*洒落本・浪花色八卦-桔梗卦「客も三日往かぬと、はやりものにおくれ、遊びがとぼつくなり」

どぼづけ 〔名〕〔方言〕ぬかみそ漬け。伊豆三宅島308 福井県458 三重県度会郡610 滋賀県蒲生郡622 京都625 大阪638 奈良県666 和歌山市675

とぼて 〔名〕とぼロから一、二歩ふみ出すこと。*雑俳・柳多留-九「三味線もおきやととぼでもさせぬ也」*滑稽本・古今百馬鹿-下「おらがあづかるからには扉出(トボデ)もさせねえぞ」

とぼと 〔名〕〔方言〕庭。軒先。三重県南牟婁郡615 和歌山県東牟婁郡675

とほ-どう ：ダウ【徒歩道】〔名〕人が歩くための道路。人道。*航米日録-四「楓樹を並べ植ゆ、所謂列木なり、其間瓦石を藉き徒歩道とす」〔発音トホドー〈標ア〉〈ホ〉

とぼ-とぼ 一〔副〕(「と」を伴って用いることもある)①ぼんやりしているさま、元気なく、疲れたさまなどを表わす語。しょぼしょぼ。*続無名抄-下「世話字尽〈略〉惘然〈トボトボ〉」*浄瑠璃・鑓の権三重帷子-下「ろくに寝ぬ夜の目もとぼとぼとほこりまぶれの髪かたち」*浄瑠璃・博多小女郎波枕-中「こりゃ姥、何をとぼとぼする」*西洋道中膝栗毛〈仮名垣魯文〉一四・下「今はは、や精も張りもぬけてとぼとぼとしてゐるところへ」②(「とぼとぼ」とも)力なく緩慢に行なう動作。特に歩くさまを表わす語。*たけくらべ〈樋口一葉〉一一「大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼとぼと歩む信如の後かげ」*思出の記〈徳富蘆花〉二・三「伯父が恐いから、僕は黙ってとぼとぼついて行く」*太政官〈上司小剣〉九「夜風の冷たい前庭へトボトボと力なげに出て行った」二〔名〕(形動)ぼんやり、うす暗くおぼつかないこと。また、そのさま。*浮世草子・好色産毛-五・四「ある夕暮のとぼとぼより、誰やら我につき添て目にありありとみゆる」*常長〈木下本太郎〉七「されば、これで君の幻からもお別れしませう。と言ふうちに日がとぼとぼになったぞ」〔方言〕三〔形動〕①精神の弱ったさま。もうろくしたさま。茨城県稲敷郡204 ②目先、足もとの鈍るさま。滋賀県蒲生郡622 三〔名〕夕暮。薄暮。三重県桑名050 〔発音〈標ア〉〔ト〕-〔余ア〕〔ト〕-

どぼ-とぼ 〔副〕〔方言〕①はなはだしく濡れたさま。滋賀県蒲生郡622 ②道の悪いさま。ぬかるみのさま。「道がどぼとぼになった」三重県志摩郡和具044

とぼとぼ-ころ 〔名〕日の暮れかかる頃。夕方。*明暗〈夏目漱石〉一四四「お延は日のとぼとぼ頃(ゴロ)に宅へ帰った」

とぼな-とぼな 〔副〕〔方言〕あちこちまばらにあるさま。ちらほら。愛媛県南宇和郡城辺827《とぼりどぼり》埼玉県秩父242

どぼね 【土骨】〔名〕(「ど」は接頭語)根性、気骨などを強めていう語。どしょうぼね。*虎明本狂言・文山立「あれはそうじてどぼねのよひものじゃ」

どぼね-こき 〔名〕〔方言〕なまけ者。新潟県東蒲原郡415《どぼねくされ》大分県東国東郡959

とぼ-へい 【徒歩兵】〔名〕徒歩の兵士。足で行動している兵士。*あらたま〈斎藤茂吉〉暗緑林「真日あかく傾きにけり一つ樹のもとに佇ずむ徒歩兵(トホヘイ)ひとり」*作戦要務令-一・二九四「主計下士官、騎兵及騎砲兵の徒歩兵等は通常其の所属部隊行李の前方に在りて」〔発音トホヘイ〈標ア〉〈ホ〉

とほほ 〔感動〕情なくみじめな気持になった時などに発することば。

とぼり 【点・燈】〔名〕(動詞「とぼる(点)」の連用形の名詞化)とぼること。燈火のつくこと。〔発音〈全まる〉トボイ〔NHK(鳥取)〕〈標ア〉〔リ〕〔ロ〕

どぼり 〔副〕(「と」を伴って用いることもある)重い物などが水に落ち込む音や、一気に湯水などにつかるさまなどを表わす語。*満韓ところどころ〈夏目漱石〉三三「共同風呂迄行って、平気な風にどぼりと浸った」〔発音〈標ア〉〔ホ〕〔リ〕

トボリスク (Tobol'sk) ソ連、シベリア西部の都市。オビ川支流のイルティシュ川の沿岸にある。一五八七年に城塞がつくられ、一八世紀後半シベリア街道の要地として栄えた。〔発音〈標ア〉〔リ〕

とほりょこう ：リョカウ【徒歩旅行】〔名〕徒歩だけでする旅行。*菊池君〈石川啄木〉四「詰り、私の精神(こころ)も、徒歩旅行が企てたくなったのだ」*祝盃〈永井荷風〉二「鎌倉へ一泊の徒歩旅行を催す廻状の葉書の来た時である」〔発音トホリョコー〈標ア〉〔リ〕

とぼ-る 【点・燈・燃】一〔自ラ四〕ともしびの火がつく。あかりがつく。ともる。*浮世草子・西鶴織留-六・一「油でも火がとぼる物かと不思義を立る」*破戒〈島崎藤村〉二〇・四「蠟燭の燃(トボ)るのを見るも悲しかった」*田舎教師〈田山花袋〉三「処々の農家に灯(ともしび)が点(トボ)って」二〔自ラ下二〕●に同じ。*ロドリゲス日本大文典'Tobore, uru(トボル)」*雑俳・ちゑぶくろ「とぼるるも葉の形りを菜の種油」〔方言燈火がつく。岐阜県郡上郡「電気がとぼった」541 広島県752《とぼれる》福岡県博多906 〔発音〈標ア〉〔ホ〕〔ロ〕〈余ア〉〔ロ〕

ドボルザーク (Antonín Dvořák アントニン-)《ドボルジャーク・ドボルジャック》チェコスロバキアの作曲家。スメタナの影響下に、スラブの民族舞曲の形式をとり入れて作風を確立。ボヘミアの民族感情に溢れた多くの曲を書いた。アメリカに渡って作曲した交響曲第九番「新世界より」は特に有名。(一八四一～一九〇四)〔発音〈標ア〉〔ナ〕

トポロジー 〔名〕(英topology)①幾何学の一部門。図形の性質のうち、位相写像(それ自身も逆写像も連続であるような全単射)によって不変に保たれるものを研究対象とするもの。位相数学。②図形や空間のもつ位相数学的性質。位相。〔発音〈標ア〉〔ホ〕

トポロジー-しんりがく 【一心理学】〔名〕ドイツの心理学者レビンの心理学全般をいう。トポロジーの問題とベクトルの問題を扱う部分から成り立つ。トポロジー的方法では個体の動因がその瞬時における心理学的場、すなわち生活空間の制約の中でどのような行動が行動として展開するかを考察する。位相心理学。〔発音〕トポロジーシンリガク〈標ア〉〔リ〕

とほん 〔名〕〔方言〕瘡(かさ)。梅毒。筑後久留米191 熊本県玉名郡945

とほん 〔副〕(多く「と」を伴って用いる。「とぼん」とも)気抜けしたり、ぼうぜんとしたりして、静まりかえっているさまを表わす語。しょぼん。しょんぼり。とほ。*日葡辞書'Tofonto(トホント)シティイル」*俳諧・崑山集-一〇秋「押ひらき戸ほんとひとり月み哉〈夕翁〉」*浄瑠璃・卯月の潤色-中「身をも所も打ち忘れ、とほんと、してぞ居たりける」*俳諧・俳諧新選-四・冬「柳枯てとほんと長き堤かな〈習先〉」*春泥〈久保田万太郎〉冬至・四「どんな長煩ひでもしたあとのやうに自分にもさうトボンと感じられた」〔方言〕「あまり思いがけなくてとほんとなった」宮城県仙台148 秋田県鹿角郡156 新潟県東蒲原郡415 〔発音〈標ア〉〔ホ〕

どぼん 〔副〕(多く「と」を伴って用いる)「どぶん」に同じ。*紀文大尽〈村井弦斎〉あなや「ドボーンと一声水音高し」*坊っちゃん〈夏目漱石〉五「どぼんと錘と糸を抛(はふ)り込んでいい加減に指の先であやつってゐた」*彦市ばなし〈木下順二〉七「ドボンと飛び込む」〔発音〈標ア〉〔ホ〕

どぼんぶ 【凡夫】〔名〕(「ど」は接頭語)煩悩にとらわれた、無知で卑しい者。*俳諧・おらが春「かかるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になしくだされと」〔発音〈標ア〉〔ホ〕

とま 【苫・簾】〔名〕①菅(すげ)、茅(かや)などを孤(こも)のように編み、家の屋根や周囲などのおおいや和船の上部のおおいなどに使用するもの。*十巻本和名抄-三「苫 爾雅注云苫〈土廉反 土万〉編菅茅以覆屋也」*後撰-秋中-二〇二「秋の田のかりほの庵のとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ〈天智天皇〉」*更級日記「とまといふ物をひとへうちふきたれば、月のこりなくさしいりたるに」*色葉字類抄「簾 トマ又ノマ 編竹葦覆舟也」*名語記-三「船の具のとま、如何。答、とまは、苫とつくれり。とまには茅草をあみてふきおほへば、かりやの躰となる也」*太平記-二「長崎新左衛門尉意見事「大船、順風に成ぬと憊て、檣(ほばしら)を立、簾(トマ)をまく」②江戸時代、大工仲間で着物をいう。*新ばん普譜方おどけ替詞「きる物ヲ、とま」③衣服をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕〔方言〕①山小屋の入口にかける筵(むしろ)。福島県南会津郡檜枝岐015 ②農閑期。新潟県中頸城郡下黒川426 ③山または森の山詞。青森県西津軽郡赤石010 〔語源説〕(1)泊まりの船に葺くところから、トマリ(泊)の義〔名言通・和訓栞・本朝辞源〕宇田甘冥〕。フナドマリブキ(船泊葺)の略〔日本語原学〕林甕臣〕。(2)人のトマル(泊)所を葺くものであるところから〔日本釈名〕。(3)雨露を止めるものであるところからトマル(止)の義〔紫門和語類集・本朝辞源〕宇田甘冥〕。(4)鳥の羽を覆ったようであるところから、トハ(鳥羽)の転か〔大言海〕。(5)トモ(戸衣)の義〔言元梯〕。(6)チノマヤの反〔名語記〕。〔発音〈全まる〉トバ〔岩手・秋田・秋田鹿角・茨城・静岡〕トンバ・ノマ〔秋田〕トンバ〔山形〕〈標ア〉〔ロ〕〈今史〉平安●●〈余ア〉〔ト〕〔古辞書字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言〕

とまに 寝(い)ね=楯(たて)[=戟(ほこ)]を枕(まくら)とす (菅や茅の上に寝、武器を枕として眠る意)山野に露営して苦心する。*書紀-顕宗二年八月(図書寮本訓)「夫れ、匹夫(いやしきひと)の子は父母の讎に居て苦(トま)に寝ね干(タテ)を枕(マくら)にして仕(つか)へず」*読本・椿説弓張月-拾遺・四九回「亡父の寃(うらみ)をここに雪(すすが)んとて、苦(トマ)に寝(イネ)戟(ホコ)を枕(マクラ)とし」

とまの屋(や) 苫で屋根を葺(ふ)いた家。苦ぶきの家。とまや。*山家集-中「とまのやに波たち寄らぬ気色にてあまり住み憂き程は見えにき」*浮世草子・本朝二十不孝-二・三「其笘(トマ)の屋の女に仮初の誓して」

とまを葺(ふ)く ①苫で屋根や舟の上をおおう。*法華経音訓「苫(トマフク)」*和英語林集成(再版)'Toma wo fuku(トマ ヲ フク)」②商品などを外へ出さないで貯蔵する。③手びろくしないで現状のまま堅く守る。〔古辞書和玉〕

とま 【鼯】〔名〕〔方言〕①いたち(鼯)。兵庫県美方郡646 高知県847 熊本県芦北郡951 宮崎県西諸県郡961 ②むささび(鼯鼠)。鹿児島県肝属郡百引044

どま 〔名〕窓をいう、盗人・てきや仲間の隠語。〔日本隠語集〕

どま 〔名〕〔方言〕突き出した山裾を道が回っている時にその突き出した所をいう。曲がり角。島根県那賀郡723 広島県山県郡中野044

どーま 【土間】〔名〕①家の中の、床を張らないで地面のままにしたところ。土場。*和英語林集成(初版)'Doma ドマ 土間」*土長塚節〈九「大きな南瓜(たうなす)が土間に転がって居ることがある」*海彦山彦〈山本有三〉「起きあがって、土間におり、木をこすり合わせて、火をたき始める」②(もと床を張らないで土のままだったところから)歌舞伎の劇場で、一

階の舞台正面の枡形(ますがた)の座席。椅子席になってからも土間と呼ぶことがある。高土間・平土間などの別がある。*戯場年表=二(古事類苑・楽舞一六)「明和三年、今年秋より中村座にて東の歩行板際一間通り、土間にさし繩張と唱る」*歌舞伎・名歌徳三舛玉垣=三立「初日からお客は山程、下地五物参りますも、出番は始まる、土間は落合ふ」*雑俳・柳多留=三〇「鶉から土間へ仲人指をさし」 発音〈標ア〉〈マ〉〈奈ア〉〈ト〉

どまの歩(あゆ)み 歌舞伎劇場で、本花道と仮花道を土間席の後方でつないでいる歩み板。観客の通路のほか演技にも用いる。歩み板。*歌舞伎・助六廓夜桜「七兵衛逃げて中の土間の歩みへ来て、かがんで居る」

どまあ 〔助〕方言例示する意を示す。などは。でも。石川県鳳至郡南志見「彼処どまあ昔はただの砂っ原やったろう」・広島県比婆郡山内西「あの時どまあ五人居った」041 《どま》富山県下新川郡入善「あの時どま」・佐賀県佐賀郡久保泉「今年どま帰って来い」041 長崎県「帰りどま寄っていらっしゃい」926 熊本県「時時どま連れて行って下さい」・大分県大分郡「茶どま寄り合うて飲もう」・宮崎県日南「杉どま何年ぐらいで成長するか」041 鹿児島県979 《どみゃ》長崎県南高来郡有家「いっぱいどみゃ飲んで来たかな」041

どま-あらい …あらひ【土間洗】〔名〕「どまばん(土間番)」に同じ。*雑俳・柳多留=一二九「田毎ほど覗きこんでる土間洗ひ」

とまい 〔名〕方言釣り船のへさきが潮流に向かっているように櫓をあやつること。愛知県知多郡587

どーまい 【土埋】〔名〕「どそう(土葬)」に同じ。*国語=呉語「王縊、申亥負、王以帰、而土=埋之其室」

とーまえ …まへ【戸前】 **一**〔名〕蔵の入り口の戸のあるところ。また、その戸。*浮世草子・色里三所世帯=中・二「厚壁にして戸(ト)まへ幾重か念を入られし」*浄瑠璃・新版歌祭文(お染久松)=油屋「外から戸前をどっさりと鼠落しの仕済(しすま)し顔」*夜明け前〈島崎藤村〉第一部・上・一・三「戸前の錠もはづしてある」 **二**〔接尾〕土蔵を数えるのに用いる。*黄表紙・莫切自根金生木=下「まだ奥の蔵の三十とまへが手がつかぬ」*開化問答〈小川為治〉二・上「自己の家は蔵が十とまへ、地面が百ヶ所」 発音**一**は〈標ア〉〈ロ〉〈奈ア〉〈ロ〉

とまえる 〔動〕方言捕える。つかまえる。広島県高田郡755 徳島県803

とまーがこい …がこひ【苫囲】〔名〕船の積荷が雨や波で濡れいたみしないように、苫でおおうこと。*財政経済史料=一・財政・輸米・港湾規定・天明二年一〇月日「且海上にて上乗船頭、苫囲等心を用、麁末成儀不致、沢手米出来無之様可致候」 発音トマガコイ〈標ア〉〈ナ〉

どまかす 〔動〕方言だます。あざむく。ごまかす。烏取県西伯郡708 出雲「どまかされて持主のある山を買わされた」716

とま-かぶり 【苫被】〔名〕外套を着ている人をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

とま-かりぶき 【苫仮葺】〔名〕苫で屋根などを仮に葺(ふ)くこと。間に合わせに苫で葺いておくこと。*浮世草子・男色大鑑=二・一「笘(トマ)かり薺(ブキ)の片びさしの内に、松火あかして声をひそめ」

とーまき 【籐巻】〔名〕物の柄(え)などを籐(とう)で巻くこと。また、そのもの。*随筆・我衣「貞享より地のもみぢがさ、きゃしゃなり、天上青紙青どさにて細くへりを取、絹糸せうぞく柄と巻」

とーまく 【外幕】〔名〕陣中の囲いに幾重にも張りめぐらした幕のうちで、最も外側に張った幕。内幕(うちまく)に対していう。近世の制では、横に五幅(の)で、第一幅を冠幅(かぶりの)・中幅(こうの)・天幅(てんの)・乳付幅(ちづけの)、第二幅を勝幅(かつの)・あいの、第三幅を中幅(なかの)・軍勝幅(ぐんしょうの)、第四幅を紋幅・平静幅(へいじょうの)・平安幅、第五幅を沓幅(くつの)・芝打・石打・芝摺(しばずり)といった。大幕。*武家名目抄=旗幟部「外幕 大幕を云」*浄瑠璃・国性爺合戦=五「龍馬(りうめ)が原に八町四方の本城(ほくじゃう)をからくみ、ぢんまく、とまく、にしきのまく」 発音〈標ア〉〈ロ〉

とーまぐち 〔名〕方言①家の入口。戸口。新潟県中頸城郡426 山梨県508 長野県513 静岡県磐田郡568 愛知県北設楽郡570 ②表入口。玄関。長野県上田520 静岡県周智郡気多044 ③勝手口。長野県更級郡信級010

どまぐれ 〔名〕(動詞「どまぐれる」の連用形の名詞化。「どまくれ」とも)まごつくこと。あわててとまどうこと。狼狽。*浄瑠璃・苅萱桑門筑紫轢=四「程なく帰る玉屋与次、道のどまくれ夜を更かし、闇を照らすする禿頭、門の柱でこっつりこ」 方言①女に迷っているような者。道楽者。熊本県菊池郡938 《どまぐれもん》大分県大野郡956 ②酔払い。熊本県鹿本郡938

どまぐ-れる 〔自ラ下一〕(「どまくれる」とも) ①まごつく。あわてる。うろたえる。とまどう。*浄瑠璃・心中刃は氷の朔日=下「心は今もさつきやみ、木のしたやみにどまぐれて」*談義本・化物判取牒=一・眼前の蛭「此年月、夢ぐらひの事にどまぐれる親仁(おやぢ)ならず」 ②まちがう。*当世花詞粋仙人「まちがひを、どまぐれる」 ③放蕩(ほうとう)する。*黄金部落〈火野葦平〉三「大将も道楽しなさったけのう。あれだけ、どまぐれりゃ、もう出てもええころじゃろ」 方言①あわてる。うろたえる。まごつく。宮城県仙台151 埼玉県川越246 愛媛県832 高知県842 《どまぐる》佐賀県912 熊本県南関947 鹿児島県971 ②遊びすぎる。遊びほうける。福岡県博多905

どまぐろ 〔名〕方言魚。①だぼはぜ。紀伊和歌山108 和歌山県田辺679 ②どんこ。兵庫県城崎郡豊岡026

とまこ 〔名〕方言いたち(鼬)。四国104 徳島県803 香川県高松050 高知県幡多郡851 《とまさこ》宮崎県西諸県郡高原961

とま-こし 【苫越】〔名〕屋根などに葺(ふ)いた苫を漏れとおすこと。*夫木=一二「山田もる木曾のふせ屋のとまこしに又袖ぬらす秋のむらさめ〈藤原家良〉」

とまこまい 【苫小牧】(アイヌ語「トマクオマイ=沼沢の地」の音写) 北海道南西部の地名。勇払平野の西部にあり、太平洋に面する。明治末期以後、製紙業が発展。昭和三八年(一九六三)には苫小牧港が開港し、石油精製・石油化学・金属などの工業が立地している。昭和二三年(一九四八)市制。 発音〈標ア〉〈ロ〉

とまこし 【富】〔形シク〕十分にある。*三体詩鈔=三「花も、葉も、実もとましき、樹木の、ある処へ」

どま-じき 【土間敷】〔名〕板の床を作らないで、土間に籾殻(もみがら)、藁(わら)、粟や黍(きび)などの茎を敷いて、その上に筵(むしろ)を延べること。また、その室。物殻(ものがら)。 発音〈標ア〉〈ロ〉

とます 〔名〕方言いたち(鼬)。福井県大飯郡476 丹波163 京都府何鹿郡631 兵庫県氷上郡042 山口県豊浦郡769 鹿児島県971

とーます 【斗】〔名〕漢字の旁(つくり)の一つ。「斜」「科」などの旁の「斗」の部分をいう。この旁をもつ字は、字典で斗部に属する。

とーます 【斗枡・斗升】〔名〕一斗をはかる枡。一斗枡。*名語記=五「斗升のます」*書言字考節用集=七「斗升 トマス 升之大者」*浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵=七「敵の首を斗升(トマス)ではかる程取ても釣(つり)合ぬ」*烏物語〈鈴木三重吉〉「やつれた母が、斗桝(トマス)へ片肘をかけて」 方言山形県村山166 福島県会津173 発音〈標ア〉〈ロ〉 古辞書書言

とーます 【富】〔他サ五(四)〕富むようにする。豊かにすること。*書紀=継体七年一二月(前田本訓)「饜、年豊(う)ることを致して頻に国を使」饒(トマス)」*読本・椿説弓張月=続・四四回「堯風舜雨、五穀を播(トマ)して、絶て賊民あることなけん」*寄笑新聞〈梅亭金鶴〉三号「金銭の融通を宜(よ)くし身代を冨(トマ)さんと思はば」 発音〈標ア〉〈マ〉〈奈ア〉〈ロ〉

トマス (Ⅰ)(Thomas) 新約聖書の十二使徒の一人。イエスに対する態度は忠誠と懐疑が錯綜(さくそう)。イエスの復活を目撃して信仰を告白した。インドに行って伝道したともされる。 (Ⅱ)(Sidney Gilchrist Thomas シドニー=ギルクリスト―) イギリスの製鋼技術家。鉄から燐を分離する方法を発明した。(一八五〇〜八五) (Ⅲ)(Dylan Thomas ディラン―) イギリスの詩人。鮮烈なイメージの詩を書き、一九三〇年代を代表する一人。その奔放な生活は、多くの伝説を生んだ。(一九一四〜五三) 発音〈標ア〉〈ト〉

トマス-アクィナス (Thomas Aquinas) イタリアの神学者、哲学者。ドミニコ教団所属。スコラ哲学の完成者。アリストテレス哲学と神学、すなわち理性と信仰の調和をはかり、実在論の立場にたち、教会の現世支配を認めた。主著「神学大全」。一二七四年没。

トマス-アーケンピス (Thomas à Kempis) ドイツの神秘思想家。修道士。その著「キリストのまねび」はキリスト教信仰の本質を説くキリスト教の古典。(一三八〇〜一四七一)

とーまそう …サウ【名】植物「えぞえんごさく(蝦夷延胡索)」の異名。

とーまた 【支】〔名〕「ぼくにょう(支繞)」の俗称。 発音〈標ア〉〈ロ〉

とーまつ 【塗抹】〔名〕①ぬりつけること。なすること。塗布。*空華集=二・次韻寄呈定山和尚「雪峰写出同風句、塗抹還如=水墨龍」*梁川星巌集=不忍池寓園雑吟「我愛緑荷紅菡萏、不須=塗抹=自然妍」*草枕〈夏目漱石〉一「丹青は画架に向って塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る」 ②ぬりけすこと。ぬりつぶすこと。また、比喩的に、除いてなくしてしまうことや、都合の悪いことなどを覆い隠したり、見て見ないふりをしたりしてうわべをつくろうこと。抹殺。抹消。*授業編=凡例「其冊子まことの草稿にして増損塗抹(トマツ)見がたければ」*改正増補和英語林集成「ヒトフデニ tomatsu(トマツ) スル」*社会主義の必要〈大西祝〉「貴人は罪悪を犯しながら尚其の跡を塗抹し易く」*小鳥の巣〈鈴木三重吉〉上・八「それを究めなければ誤魔化しである。自己を欺く塗抹である」*隠窟雑志=楊文公有=重名於世、常因=草制為=執政者多所=点竄、略因取=藁上塗抹之処、以=濃墨=傅=之」 発音〈標ア〉〈ロ〉 〈奈ア〉〈ロ〉

どーつく 〔動〕方言①あわてる。まごつく。青森県川岩手県130 宮城県石巻147 福島県東白川郡174 茨城県新治郡201 富山県430 石川県金沢440 岐阜県稲葉郡535 愛知県知多郡537 三重県度会郡610 京都府竹野郡626 兵庫県明石郡山田049 ②ごたごたして時間をつぶす。「祭やら何やらですっかりどまついてしまった」岐阜県郡上郡541 ③物言いがどもる。宮城県栗原郡140

とまーて 【苫手】〔名〕苫につけてあって、苫を葺(ふ)き合わせる時に縛るのに用いる細い縄。

とまーて 【菞手】〔名〕語義未詳。苫(とま)の端の意か。一説に、苫でふいた屋根のおおい。*万葉=一〇・二一七六「秋田刈る菞手(とまて)動くなり白露し置く穂田なしと告げに来ぬらし〈作者未詳〉」 補注「万葉」例は、「衣手(そで)」の誤りとする説、「廬戸(いほと)」の誤字とする説などもある。

トマト 〔名〕(英tomato)《トマトー》ナス科の一年草。西南アメリカ原産で、重要な果菜として世界的に栽培され、おびただしい数の栽培品種がある。高さ〇・五〜一・五メートル。全体に白い軟毛を密生し特有の臭気がある。葉は羽状複葉で長さ一五〜四五センチメートル、小葉は卵形または長楕円形で五〜九対。花期は一般

に夏で、葉腋に総状花序を出す。花は径二センチ㎝ぐらいで黄色。果実は液果で、形や色や大きさは多様性に富むが日本では扁球形・球形・楕円形の品種が多く、果色も紅色が多く、他に黄色、白色などもまれにみられる。生食するほかソース・ケチャップ・ジュースなどの原料になる。漢名、小金瓜・蕃茄。あかなす。さんごじゅなすび。とうがき。*くれの廿八日〈内田魯庵〉三「トマトオとブルケイ酒の好物ってのは辟易する」*思ひ出〈北原白秋〉断章「紅のトマト切り、ウキスキーの酒や呼ばむ」*平戸廉吉詩集〈平戸廉吉〉厨房「甘く熟した蕃茄（トマトウ）にも籠をはみ出てゐる葡萄の粒にも」 発音〈標ア〉[上]1 〔マ〕〈奈ア〉〔マ〕

とーまどい …まどひ【戸惑】〔名〕①夜中に目をさまし、寝ぼけて方角がわからなくなってまごつくこと。ねまどい。*滑稽本・東海道中膝栗毛二・下「いやわっちは小便におきた所が、つい戸まどいをして」②はいるべき家・室などがわからなくてまごつくこと。*西洋道中膝栗毛〈総生寛〉一五・上「あんまり狼狽（あはて）くさって博覧会の門口で戸惑（トマド）ひでもすると極まりが悪い」*黴〈徳田秋声〉六四「勝手違ひなところへ戸惑をして来たやうな気がして」③手段や方法がわからなくてまごつくこと。勝手がわからないで躊躇すること。*二人女房〈尾崎紅葉〉中・五「母親も戸惑（トマドイ）して此処少時（しばらく）黙然（だんまり）」*夢の女〈永井荷風〉八「何から云出さうと各（おのおの）途迷（トマド）ひするらしい」*帰郷〈大仏次郎〉林泉図「何かまだ、感情が戸惑ひして出口を塞がれてゐる」 発音〈標ア〉[上]〔〕〔マ〕〈奈ア〉〔マ〕

とーまど・う …まどふ【戸惑】〔自ワ五（ハ四）〕〔名詞「とまどい」からできた語か〕手段や方法がわからなくて困る。どうしてよいかわからないでまごつく。まごまごする。 発音〈文〉トマドーとも 〈標〉[上]

トマト-ケチャップ 〔名〕（英 tomato ketchup）トマトピューレを食塩、砂糖、各種香辛料で調味したソース。 発音〈標ア〉[平上] 〈奈ア〉〔〕

トマト-ジュース 〔名〕（英 tomato juice）熟したトマトをつぶして作った液汁。 発音〈標ア〉[ジュ]

トマト-ソース 〔名〕（英 tomato sauce）切ったトマトに火を通してからこしたものに食塩・バター、こしょうなどを加えて調味したソース。肉・卵・野菜などの西洋料理によく使われる。*廃虚の街〈火野葦平〉「バターとトマトソースでまぜるといふ特殊の料理法」 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕

トマト-ピューレ 〔名〕（フ tomate purée）トマトをつぶしてこしたもの。スープ、ソース、煮込み料理の調味料として使われる。 発音〈標ア〉[ピ]

とまど-ふさぎ 【戸窓塞】〔名〕東北地方で、節分や大晦日の晩に、鰯の頭を豆がらに刺して邪霊を防ぐ行事。

どま-どま 〔副〕「とどまぎ」に同じ。*新世帯〈徳田秋声〉一「頭から誹謗（けな）されると、お作の心はドマドマして、何が何だか薩張（さっぱり）解らなくなって来る」*田舎教師〈田山花袋〉一二「声が散ってよく聞取れないんだから、ドマドマして了ったよ」

どま-ばん 【土間番】〔名〕江戸時代の歌舞伎の劇場で、土間の見張りをし、無銭の客をとりしまり、場席の整理をする番人。どまあらい。*劇場新話-上「土間番といふもの是を割渡す」*雑俳・柳多留-一〇七「土間番の洗ひこが来て油ぬき」 発音〈標ア〉〔〕

とま-びさし 【苫庇】〔名〕苫で葺（ふ）いたひさし。*新古今-恋二・一一一五「いつとなく塩やく蜑（あま）のとまびさし久しくなりぬあはぬ思ひは〈藤原基輔〉」*東関紀行-興津より車返「この釣するあまのとまびさしいとふありかや袖にのこらん」 発音〈標ア〉[ビ]

とま-ぶき 【苫葺】〔名〕苫で屋根を葺（ふ）くこと。また、その葺いた屋根。*日葡辞書「Tomabuqini（トマブキニ）スル」*浮世草子・椀久一世-下・六「舟の苫葺（トマフキ）を引まくりて」*俳諧・奥の細道-黒部「蜑の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと」 方言①葬式の翌日に、墓の上に置く竹わくの苫のおおい。愛媛県温泉郡神和044 ②新墓の上をおおう屋形。長崎県五島玉之浦936 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔〕

とまぶき-やね 【苫葺屋根】〔名〕苫で葺（ふ）いてある屋根。苦葺き。 発音〈標ア〉[ヤ]

とま-ぶね 【苫船】〔名〕苫で船の上部または屋根を覆った船。近世では停泊中の船が帆柱・番木（つがいぎ）・水棹（みざお）などで仮の屋根組みをし、その上に苫をかける場合が多い。*御触書寛保集成-五〇・享保四年九月「覚〈略〉一道筋川々の船とも竝能、見苦敷船共は跡えくり候様に仕、苦船にて見物候とも、行儀能く見物可仕候」*俳諧・太祇句選-冬「笘ぶねの霜や寐覚の鼻の先」 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉〔ブ〕

とまぶりや 【名】土蔵の窓口から侵入することをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

とま-ほ 【苫帆】〔名〕苫を用いた帆。また、笹帆の別称。*和漢船用集-一一・用具之部「笹帆〈略〉これ網代帆なり、とまほと読せり」 発音〈標ア〉〔〕

とーまめ 【唐豆】〔名〕方言植物。①とうもろこし（玉蜀黍）。山形県一部024 長野県北安曇郡514 ②そらまめ（空豆）。岐阜県大垣535 愛知県569 三重県志摩郡602 和歌山県682 大阪府一部024 長崎県五島936 宮崎・鹿児島両県一部024

とま-や 【苫屋】〔名〕苫で屋根を葺（ふ）いた家。苦葺きの粗末な小屋。とまのや。とまやかた。*源氏-明石「興をさかすべき渚のとまや」*新古今-秋上・三六三「み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ〈藤原定家〉」*太平記-一八・春宮還御事「松浦理に折れて、御息所を篷屋（トマヤ）の内に荒らかに投げ棄て奉る」 発音〈標ア〉〔〕〈奈ア〉[上]

とまや-がい …がひ【苫屋貝】〔名〕トマヤガイ科の二枚貝。本州以南の沿岸に分布し、潮間帯の岩や小石に足糸で付着する。殻はほぼ方形で、長さ約三センチ㎝、幅は約二センチ㎝。殻表には鱗状の降起のある約一三条の太い肋（ろく）が並ぶ。外面は灰褐色で内面は白い。 発音トマヤガイ 〈標ア〉[ヤ]

とまやかた 【苫屋形】〔名〕①苫で屋根を葺（ふ）いた家。とまや。*山家集-下「磯に寄る波に心の洗はれて寝覚めがちなるとまやかたかな」*拾遺愚草員外「大井河夏のみむすぶとまやかた短夜ながら月も宿らじ」②苫で葺いた舟の屋形。*日葡辞書「Tomayacata（トマヤカタ）〈訳〉苫で作った覆いで、舟にある、その下で眠るためのもの」

とまや-ね 【苫屋根】〔名〕苫で葺（ふ）いた屋根。*旅日記から〈寺田寅彦〉一「小船の苫屋根は竹で編んだ円頂で黒く煤けて居る」 発音〈標ア〉〔〕

とまや-ぶんりん 【苫屋文琳】茶入の一つ。大名物。唐物文琳形茶入。所蔵者竹中采女から銘を求められた小堀遠州が、この茶入に取り立てる景色のないところから、定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫やの秋の夕暮」の歌意にちなんで銘したと伝える。 発音〈標ア〉[ブ]

とーまよい …まよひ【戸迷】〔名〕まごつくこと。とまどい。*殉情詩集〈佐藤春夫〉同心草・感傷肖像「表情の戸まよひしたこのモナリザはまるで小娘だ」 発音〈標ア〉〔マ〕

とーまら 【枢】〔名〕（「と」は戸、「まら」は男根の意）開き戸の框（かまち）の上下両端の突き出た部分。枢（とぼそ）にさし入れて、戸を支えて開閉の用をするもの。*十巻本和名抄-三「枢 爾雅云枢〈音朱〉謂之楣〈音隈 度保曾 俗云度万良〉孫炎曰門戸之枢也」*観智院本名義抄「枢 トボソ トマラ」 発音〈今史〉平安●●● 〈奈ア〉〔〕 古辞書和名・名義・和玉

とまり 【止・留・泊】〔名〕（動詞「とまる（止）」の連用形の名詞化）(一)（止・留）①とまること。とどまり。また、そのところ。*日葡辞書「Tomari（トマリ）〈訳〉止まる場所。すわる所」②最後に落ち着くところ。終わり。果て。しまい。決着。*古今-秋下・三一一「年ごとにもみぢばながす龍田がはみなとや秋のとまりなるらん〈紀貫之〉」*源氏-宿木「忍びつつ、又思ひます人なき、心のとまりにてこそはあらめ」*浄瑠璃・用明天皇職人鑑-四「すくねもとまりつかざればヲヲ身が勝手なら首取らんと、飛んでかかるを」③最後まで連れ添う人。終生を託する相手。本妻。*源氏-帚木「若き程のすき心には、この人をとまりにとも思ひとどめ侍らず」*浜松中納言-四「思ふさまならん人をだに見つけたらば、それに、やがて我が世のとまりに定めて」(二)（泊）①船が停泊すること。また、そのところ。船着き場。港。津。*万葉-二・一二二「大船の泊（は）つる登麻里（トマリ）のたゆたひに物思ひ痩せぬ人の子ゆゑに〈弓削皇子〉」*十巻本和名抄-三「泊 唐韻云泊〈傍各反 度末利〉止也」*土左-承平五年二月四日「このとまりのはまには、くさぐさのうるわしきかひ、いしなどおほかり」②宿泊すること。また、その場所。宿屋。*山家集-上「旅まかりけるとまりにて 飽かずのみ都にてみし影よりも旅こそ月はあはれなりけれ」*海道記-竹の下より逆川「一生の思出は今夜の泊にあり」*虎寛本狂言・磁石「妥は物騒な程に、泊りへ着た成らば某に預けさしめ」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・一〇「交際も可し、間には御外宿（トマリ）も可いけれど」③宿泊する旅人。泊まり客。*浮世草子・好色一代女-六・二「物じて客のために抱（かかへ）し女、親方の手前よりきうぶん取にもあらず、ロばかり養はれて其替りに泊（トマ）り留てやる事なり」④宿泊の料金。*いさなとり〈幸田露伴〉一五「宿銭（トマリ）も例より廉（やす）くして呉るれば」⑤宿直すること。*道草〈夏目漱石〉五「昨夕も宿直（トマリ）でね」 方言①港。北海道101 《とっまい》鹿児島県喜界島991 ②嫁が里へ帰って泊まること。広島県山県郡中野044 発音〈標ア〉〔〕〈今史〉平安●●● 〈奈ア〉〔〕 古辞書和名・色葉・名義・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

とまり 旅人（たびびと）**朝旅人**（あさたびびと） 泊まった旅人は朝には出発するのが道理である。*北条氏直時代諺留「とまり旅人朝旅人」

とまり を 買う 女郎などを買って宿泊する。泊まりを付ける。*うんてれがんの見立「夜なか泊り買うて宵から寝てゐる客」

とまり を付ける（=取る） 「とまり（泊）を買う」に同じ。*洒落本・浪花色八卦-龍胆卦「寐る事一べんの客は四つより泊（トマ）りを取て〈略〉酒ものまずに屏風に入りゆっくりとやるもおかし」*歌舞伎・三人吉三廓初買-四幕「是から何処ぞへ、泊りを付けようぢゃあねえか」

どまり 【止】〔語素〕①地名の下に付けて、そこが乗り物の終点であることを示す。*旅日記から〈寺田寅彦〉一〇「バーゼル止りの客車へ乗り込んで居たが」②数量を表わす語の下に付けて、それ以上にならないことを示す。*子をつれて〈島西善蔵〉二「その辺には彼に恰好な七円止まりといふやうな貸家のあらう筈はないのだが」*放浪時代〈龍胆寺雄〉一・四「費用はせいぜい五六円から十二三円どまりです」

とまり-あけ 【泊明】〔名〕宿直を済まして退出すること。あけばん。*勘契備忘記-中（古事類苑・政治五九）「享保十九寅年、浅草御蔵役人勤方納米改方等之定書〈略〉川通御成之節は、御成以前、組頭一人御役所え罷出、泊明之御蔵奉行と両人相勤」 発音〈標ア〉〔〕

とまり-あゆ 【留鮎】〔名〕秋に産卵した後も海へ下らないで、川にとどまって越年する鮎。 発音〈標ア〉[ア]

とまり-ある・く 【泊歩】〔自カ五（四）〕あちこち泊まって回る。*自由学校〈獅子文六〉五笑会の連中「友人の

家でも泊り歩いているのだろうが」 発音〈標〉ア ル

とまり-あわ・せる ：あはせる【泊合】〔自サ下二〕 文とまりあは・す〔自サ下二〕たまたま同じ宿などにいっしょに泊まる。*浮世草子-好色一代男-四-一「折々は媚たる者の泊（トマ）り合てならはしけるか」*滑稽本-統膝栗毛-一一-上「いめへましい家にとまりあはせた」 発音〈標〉ア セ 〈奈ア〉〇 文〔とまりあはす〕トマリアワス 〈標〉ア 〈奈ア〉〇

とまり-がけ 【泊掛】〔名〕 宿泊する予定で出かけること。*俳諧-毛吹草追加-中「あさがほや見に行ならば泊（トマリ）かけ〈長治〉」*俳諧-正章千句-二-花「花の香や寝てみる袖に泊りがけ」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前-六-二「それぢゃ泊懸（トマリガケ）にお手伝に来てゐると云ふやうな事実（わけ）かね」 発音トマリガケ 〈まま〉トマーガケ〔鳥取〕〈標〉〇 〈奈ア〉〇

とまり-がらす 【泊烏・泊鴉】〔名〕 ①ねぐらに帰る烏。やどりがらす。*浄瑠璃-寿の門松-中「雁（かり）の数よむ朧月、とまり烏のよるべなき」*俳諧-鶉衣-拾遺-上-一八四-鴉箴「夕べれの端居に、泊がらすの三つ四つつれたるは」 ②烏金（からすがね＝日ぎめで貸す高利の金をその日のうちに返さないで、翌朝まで延引すること。*随筆-当世武野俗談-車婆々「一日の内に返さずして一夜延引するを泊り烏と云。夫は四百文、利足取ることなり」 古辞書書言

とまり-がり 【泊符】〔名〕 山野に泊まって、早朝に鷹で狩りをすること。《季-春》*俳諧-懐子-二「せこの者来べき宵也とまり符〈守武〉」*俳諧-滑稽雑談-二月「鷹百首抄云、是もとまり山・泊り狩にあり、鷹にかけたる鈴に鈴の子と云物を鈴にさして、鳴らざるやうにして鷹をすへて」

とまり-ぎ 【止木】〔名〕 ①鳥がとまるように設けた横木。鳥籠・鳥小屋などの横にわたした棒。*俳諧-犬子集-四-木槿「鳴鳥のとまり木迄もむくげ哉〈休音〉」*俳諧-毛吹草追加-上「荷なひぬる棒やとまり木鶯菜〈重供〉」*雁〈森鷗外〉一七「籠の中の鳥は〈略〉止（トまり木（ギ）をしっかり攫（つか）んで」 ②バーなどで、カウンターの前に置く高い腰掛け。 発音トマリギ 〈標〉ア 〈奈ア〉〇

とまり-きゃく 【泊客】〔名〕 泊まり込みの客。宿泊している客。宿泊人。投宿人。*浮世草子-男色大鑑-七-三「戸張のうちより今宵は思ひよらざるとまり客（キャク）あり」*随筆-独寝-下-一〇八「此張勝が所に来りて、火伴（注〉トマリキャク）のあきんどとなりて、寝臥する事数年也」*俳諧-太祇句選-後篇-冬「口切のとまり客あり峯の坊」 発音〈標〉ア 〈奈ア〉〇

とまり-ぐさ 〔名〕 植物「なでしこ（撫子）」の異名。*俳諧-牛飼-二-石竹「花に目のくれてや爰にとまり草〈常順〉」*重訂本草綱目啓蒙-一二-隰草「瞿麦 とまりぐさ」

とまり-くち 【止口】〔名〕 馬術で、馬の口むきの癖をいうか。すわりくち。*弓張記「とまり口とも。すはり口とも。いづれをいふてもくるしからず」

とまり-こ 〔名〕 方言若者宿の仲間。愛知県日間賀島 009 愛媛県大三島 834

とまり-こみ 【泊込】〔名〕 泊まりこむこと。*社会百面相〈内田魯庵〉貴婦人-上「また泊込みで之を（と己れの鼻頭（はな）を指して）行（や）ってましたネ」 発音〈標〉ア 〇

とまり-こ・む 【泊込】〔自マ五（四）〕 ある特殊な事情のために、帰宅しないでそのままそこで泊まる。*思出の記〈徳富蘆花〉四-一八「果ては宅は暑くて騒々しくて眠られぬと云って、泊り込んで行く始末」*坊っちゃん〈夏目漱石〉一一「なぜ芸者と一所に宿屋へとまり込んだ」 発音〈標〉ア 〇 〈奈ア〉〇

とまり-せん 【泊銭】〔名〕 「とまりちん（泊賃）」に同じ。 発音〈標〉ア 〇 リ

とまり-センター 【止―】〔名〕〈センターは英center〉 旋盤などの工作機械の中心点で、工作中も回転せずに静止しているところ。独楽（こま）の軸の中心点のようなところ。

とまり-ぞめ 【泊初】〔名〕 方言①婚約中のよい日を選んで娘を連れて来ること。群馬県吾妻郡六合村小雨 220 ②仮祝言。長野県上伊那郡高遠 048 ③正月一日または二日に親類の男が泊まりに来ること。三重県飯南郡森 604

とまり-だけ 【止竹】〔名〕 鶏小屋などの竹製のとまり木。*浮世草子-好色一代男-二-五「庭鳥のとまり竹に湯を仕懸けて夜深になかせて」

とまり-たけのこ 【止筍】〔名〕 夏半ば過ぎに生じた筍で、生長することなく立ち枯れたもの。《季-夏》*俳諧-滑稽雑談-四月「仙人杖竹（をひしまひたけ）〈略〉陳蔵器曰、此是筍竹と成らんと欲する時立死する者なり、色黒して漆の如し〈略〉是俗に云とまり筍也」

とまり-ちん 【泊賃】〔名〕 宿泊料。宿賃。とまり銭。 発音〈標〉ア 〈奈ア〉〇

とまり-づき 【止月】〔名〕 妊娠して月経の停止する月。*改正増補和英語林集成「Tomarizuki トマリヅキ〈訳〉妊娠の起こる月」

とまり-づけ 【泊付】〔名〕 江戸時代、武家などが旅行の先触れに、宿泊予定の日時・場所を記すこと。*五街道取締書物類寄-一四-先触之類-（文政五年二月）「一、諸家之内旅行之節、泊付無〻之先触差出候向も有〻之、於三宿駅一人馬触当は勿論、旅宿手当等も差懸り取計、及三混雑一候趣に付、泊付無〻之先触は不三差出一様可〻致旨、相達候事」

とまり-っぽう ：ッパ【泊坊】〔名〕 「とまりにん（泊人）」に同じ。*洒落本-玉の帙-二「とまりっぽうだろう。はやくけいしていよ」

とまり-ど 【泊人】〔名〕 「とまりにん（泊人）」に同じ。*浄瑠璃-丹波与作待夜の小室節-中「息の有たけしゃべって、それでもとまりど有事か、どふしたことやら此比は一膳盛の客さへない」*談義本-艶道通鑑-三-一六「家富かかへの女も数ありて、ことさら大勢の泊（トマリ）人をうけて賑けるに」*浄瑠璃-右大将鎌倉実記-三「泊人（トマリド）あれば仕事の邪魔と」

とまり-どころ 【泊所】〔名〕 泊まる所。宿泊する場所。*滑稽本-統膝栗毛-一一-上「何をいふも外に泊（トマリ）どころがねへといふものだから、どうもしかたがねへ」 発音〈標〉ア 〇 下

とまり-とまり 【泊泊】〔名〕（「とまりどまり」とも）いくつもの泊まり。旅のその日その日。*万葉-一九-四二四五「漕ぎ泊（は）てむ 泊々（とまりとまり）に荒き風 浪にあはせず〈作者未詳〉」*俳諧-冬の日「笠は長途の雨にほころび、帋衣（かみこ）はとまりとまりのあらしにもめたり」*妻木〈松瀬青々〉秋「水雲にとまりどまりや角力取」 発音〈標〉ア 下 2 古辞書黒本

とまり-どり 【止鳥】〔名〕 止まり木にとまっている鳥。*書言字考節用集-五「宿鳥 トマリトリ」*改正増補和英語林集成「Tomaridori トマリドリ〈訳〉とまり木の上の鳥」 発音〈標〉ア リ 古辞書書言

とまり-にん 【泊人】〔名〕 宿泊する人。宿泊人。とまりど。とまりっぽう。 発音〈標〉ア 〇

とまり-ばめ 【止嵌】〔名〕 嵌合（はめあい）の一つ。穴の公差範囲と軸の公差範囲が重なっているもの。最小公差の穴より最大公差の軸の方が大きいが、最大公差の穴よりは小さい。「すきまばめ」と「しまりばめ」の中間。 発音〈標〉ア 〇

とまり-ばん 【泊番】〔名〕 交替で泊まって夜を守る当番。宿直。とのい。*俳諧-類船集-己「とまり番の扈従の御座近くふしけるは立身のもとゐとぞ」*浮世草子-懐硯-二-三「大旦那の泊番（トマリバン）の夜お袋さまの霄まどひの時」*詞葉新雅「トマリバンスル とのゐする」 発音〈標〉ア 〇 リ 〈奈ア〉リ 古辞書書言

とまり-ふだ 【泊札】〔名〕 参勤交代の諸大名が道中で宿泊する時、宿場の本陣で「何々様御泊り」と書き、一丈五、六尺（約四・五㍍）の青竹にはさんで、宿場の端に立てて出迎えた札。関札。*雑俳-柳多留-一四六「青竹の頭（かうべ）に守の泊り札」

とまり-ぶね 【泊船】〔名〕 停泊している船。ふながかりした船。かかりぶね。*新撰六帖-三「湊えにかし振りたつるとまり舟流るるまでに塩は満ち来ぬ〈藤原家良〉」*新撰菟玖波集-羇旅-下「しらぬ淵瀬ぞ袖にながるる とまり舟河風吹きてくらき夜に〈兼載〉」*浄瑠璃-松風村雨束帯鑑-四「身の置き処いづくとも、さして定めんとまりぶね」 発音〈標〉ア

とまり-やど 【泊宿】〔名〕 宿屋。はたごや。旅宿。*珊瑚集〈永井荷風訳〉奢侈「心の旅路に彷徨ふ巡礼者の泊り宿」 方言若者宿。愛媛県温泉郡怒和島 044 長崎県五島 932 《とまりや》三重県北牟婁郡須賀利 044 発音〈標〉ア 中

とまり-やま 【泊山】〔名〕 翌朝早く鷹狩りをするために、山中に宿ること。《季-春》*西園寺鷹百首「とまり山かりに出ぬと人も見よ朝夕たてぬ宿のけふりを」*定家鷹三百首-冬「泊山冬の夜すがら枕より跡にもつなぐ犬の鈴音」*俳諧-増山の井-二月「ききすゑ鳥、鳴鳥狩、とまりかり、とまり山、朝鷹、すずこさす、かりばの雉に声をむすべば春也」

とまる 【止・留・停・泊】 ■〔自ラ五（四）〕 (一)動かないでいる。そこに位置して離れないでいる。①動いていたものが、動かなくなる。停止する。*万葉-一九-四一六〇「吹く風の 見えぬが如く 行く水の 登麻良（トマラ）ぬ如く大伴家持」*コリャード日本文典「アチカラ トメラルトモ tomaru（トマル）ナ」 ②とりやめになる。中止になる。*枕-九八-くちをしきもの「いとなみ、いつしかと待つことの、さはりあり、にはかにとまりぬる」*源氏-朝顔「神わざなどもとまりてさうざうしきに」 ③立ち止まる。たたずむ。やすらう。*枕-九五-ねたきもの「簾のもとにとまりて見たる心地こそ、飛びも出でぬべき心地すれ」*源氏-蓬生「今宵も、ゆきすぎがてに、とまらせ給へるを」*徒然草-八七「日暮にたる山中に、あやしきぞ。とまり候へ」 ④つかえる。とどこおる。*虎明本狂言-伊文字「まりはゑだにとまった」 ⑤通じなくなる。ふさがる。*浄瑠璃-生写朝顔話-宿屋の段「ヲヲ其侍は今の先渡った。が、俄の大水で川が留った」 (二)一定の位置に固定する。①付着する。固着する。つく。*栄花-暮まつ星「とまりたる匂などもなべてならずと、人々めであへり」 ②目・耳・心などにつく。*源氏-帚木「よきあしき事の、目にも耳にもとまる有様を」*山家集-中「なにごとにとまる心のありければ更にしもまた世の厭はしき」*日葡辞書「ダンギヲ キケドモ ナニモ ミミニ tomaranu（トマラヌ）」*忘れえぬ人々〈国木田独歩〉「甲板の上で色々と話しかけた人もあったらうが、何にも記憶に止（と）まって居ない」 ③落着する。終結する。決着する。*源氏-若菜上「ましてことはりも何も、いづこにとまるべきにか」*山家集-下「ともしびの揭（かか）げ力も無くなりてとまる光を待わが身かな」 ④つかまる。特に、鳥や虫などが枝の上などでからだを安定させる。*日葡辞書「トリガ キノ ヱダニ tomaru（トマル）」*俳諧-俳諧新選-三-秋「とまらんと水にも望むとんぼ哉〈鼓舌〉」*当世書生気質-坪内逍遙-二「背後（うしろ）から肩にとまりて、ぶらさがるやうにする」 ⑤（「高くとまる」の意）えらぶっている。*人情本-仮名文章娘節用-前-二回「ヘンおつうとまりたがるやつだの」 ⑥妊娠する。「腹に宿る」意と「月経が止まる」意と両方からいう。*浮世草子-好色二代男-三-一「誰子ともしれず、とまって、お腹をなやみといふ時」*雑俳-柳多留拾遺-巻八上「うつ向てみゃくを見せるかとまったの」*禽獣

〈川端康成〉「ちょっと見えなくなったと思ふと、もう野良犬がかかってるんです。〈略〉反ってこんなのは、皮肉なもんでさ、よくとまるんでして」 ㊂行かないでいる。残る。①あとに残る。とどまる。*万葉-九・一七八六「み越路の雪降る山を越えむ日は留有(とまれる)吾れを懸けて偲はせ〈金村歌集〉」*土左-承平五年一月七日「ゆくひともとまるも袖のなみだがはみぎはのみこそぬれまさりけれ」*源氏-帚木「さるべき女房どもばかりとまりて」 ②生き残る。とどまる。*源氏-桐壺「今までとまり侍るがいと憂きを」*浜松中納言-四「とまり侍人の上は、きこえおき侍りにしかば、うしろやすく思う給へて」*新勅撰-雑三・一二五四「とまりゐる身もおいらくののちなればさらぬわかれぞいとどかなしき〈覚寛〉」 ㊃(泊)ある場所に、ある時間、継続してとどまる。①船が港で夜を過ごす。停泊する。*土左-承平四年一二月二九日「廿九日、おほみなとにとまれり」 ②出先で宿をとる。宿をかりる。宿泊する。やどる。*枕-一四・市は「つば市。大和にあまたある中に、長谷に詣づる人のかならずそこにとまるは、観音の縁のあるにや」*源氏-松風「野にとまりぬる君だち、小鳥しるしばかり引きつけさせたる荻の枝など」*東関紀行-赤坂より橋本「行く人、心をいたましめ、とまるたぐひ、夢をさまさずといふことなし」 ③宿直する。とのいする。*源氏-末摘花「御とのゐ所に、やがてとまり給ひぬるやうにて、夜ふかして、おはしたり」*源氏-東屋「宮は、うちにとまり給ぬるを見おきて、ただならずおはしたるなめり」 ㊄『他ラ四』①やめる。よす。*雲形本狂言・石神「何が扨此後はふつつと酒をとまりませう程に」*ロドリゲス日本大文典「サラバト アッテ ジガイヲ tomaraxerareta(トマラセラレタ)〔八島〕」 ②停止させる。くいとめる。*浄瑠璃・冥途の飛脚-下「野口のみぞの水水滑るをとまる高足駄」 方言①蚕が眠る。群馬県山田郡234 東京都南多摩郡042 山梨県502 徳島県805 ②牛などが受胎する。「どうやらとまったらしい」京都府竹野郡626 ③受胎する。神奈川県中郡289 新潟県中頸城郡427 語源説(1)ツマルの転〔和訓栞・大言海〕。(2)トミアル(戸見有)の義〔名言通〕。(3)ト(所)を活用した語〔日本語源=賀茂百樹〕。 発音㊊ア/①〈京ア〉①

とまらぬ駒(こま) 年月の早く過ぎ行くことのたとえ。ひま行く駒。ひま過ぐる駒。*拾遺愚草-中「いかにせんはてなき人は世にもなしとまらぬこまのかげは過ぐめり」

とーまれ 〔副〕「ともあれ」の変化した語。*名語記-五「さまれ、とまれなどいへる」*海に生くる人々〈葉山嘉樹〉二五「兎まれ先が見えないと云ふことは、安心のならないことであった」 発音㊊ア/①〈京ア〉①

とまれ=かくまれ[=こうまれ] 「ともあれかくもあれ」の変化したもの。*竹取「とまれかくまれ、まづ請じ入れたてまつらむ」*土左-承平五年二月一六日「とまれかうまれ、とくやりてん」*源氏-手習「いとおそろしくあやうきことなりとおぼして、とまれかくまれおぼしたちての給を」*増鏡-一五・むら時雨「又とまれかくまれ、まことのおはしましところを、あぶなく武家へ知らせじのたばかりにやありけん」*読本・春雨物語-二世の縁「とまれかうまれ、よみぢがへらせてん」

とまん-こう ：カウ【豆満江】朝鮮半島の北東部を流れ、中国・ソ連との国境をなす朝鮮第三の大河。白頭山の東部に源を発し、北東へ流れて日本海に注ぐ。冬期は結氷する。全長五二〇キロ㍍。流域面積一万五一三平方キロ㍍。中国名は図們江。とうまんこう。トマンカン。 発音トマンコー 〈標ア〉マ

どーまんじゅう ：マンヂュウ【土饅頭】〔名〕土を饅頭のように丸く盛り上げた墓。土墳。*壙嚢鈔-七、墳墓を土饅頭(ドマンヂウ)と云。仍て宋人の句にも云。何処漢山松竹下、又添二箇土饅頭一と云々。如此詞、只禅家に用歟」*元和本下学集「墳墓 フンホ 土饅頭(トマンヂウ)也」*雑俳・伽草紙「酒好も世の酔さめは土饅頭」*田舎教師〈田山花袋〉一二「風雨に曝(さら)されて黒くなった墓標が土饅頭(ドマンヂュウ)の上にさびしく立って居る」 発音ドマンジュー 〈標ア〉マ

どーまんなか 【真中】〔名〕(「ど」は接頭語)「まんなか(真中)」を強めていう語。まんまんなか。*春泥〈久保田万太郎〉向島-一「むかしながらの常夜燈の、道のどまん中(ナカ)にしらじらと打捨られたやうに立ってゐるのが」 方言新潟県中頸城郡427 富山県432 岐阜県土岐郡535 静岡県志太郡561 滋賀県619 京都府626 大阪638 兵庫県明石郡656 奈良県666 和歌山県685 発音〈なま〉ドーマンナカ〔山梨奈良田〕〈標ア〉マ

とみ 【富】〔名〕(動詞「とむ(富)」の連用形の名詞化)①とむこと。*兼盛集「まねかねどあまたの人のすだくかなとみといふものぞたのしかりける」*皇太神宮年中行事-御饌腊事鳥名子舞歌「しだらは 米(よね)はや買はば 酒汲みあげて盛(も)れ とみの使ひぞ」 ②豊かな財産。集積した財貨。*書紀-皇極三年七月〈岩崎本室町時代訓〉「呼は使めて曰く、新(にひ)しき富(トミ)入来(きたれり)。都鄙(ひな)の人、常世の虫を取りて、清座(しきゐ)に置く」*宇津保-国譲上「おもほえずとみをもせさせ給へるかな」*源氏-東屋「直人のかきりなきとみといふめるいきおひにはまさり給へり」*大唐西域記長寛元年点-一「富(トミ)巨万なりと雖も、服食飽弊なり」*曾我物語-一二・母、二宮ゆきわかれし事「とみたからも、つゐに夢のうちのたのしみなり」*書経-呂刑「典獄非'訖'于威、惟訖'于富」 ③「とみくじ(富籤)」に同じ。*雑俳・西国船「打込んで富はあなたのおあてがい」*黄表紙・莫切自根金生木-中「世の中にはとみで身代をしまふもあるから」*滑稽本・東海道中膝栗毛-八・上「此時分はざまのみやに富のありし時節にて」*歌舞伎・法懸松成田利剣-大詰「イヤア、おぬしは大分工面がいいな。富(トミ)でも取りゃアしねえか」 語源説⇩「とむ(富)」の語源説。 発音㊊ア/①〈京ア〉①

とみが落ちる 富くじに当たる。

とみす 財産がふえる。豊かになる。富む。*源氏-行幸「なるべき人ものし給ふやうに聞き給ふれは夢にとみしたる心地し侍りてなむ、胸に手を置きたるやうに侍と申給ふ」*催馬楽-葛城「しかしてば 国ぞ栄えむや 我家(わいへ)らぞ 止美世(トミセ)むや」

とみの袖(そで) 富くじの、一番札の前後の番号の札。若干の金額が賞金としてふり当てられた。

とみの出番(でばん) 富くじの当たり番号。*随筆・わすれのこり-下「富興行「第付とて、一の富の出番によりて、博奕の様なること流行す、禁ぜられしが内々にてする者あり、出番を売りに来る者、今日のおはなしといひてうり来る」*随筆・守貞漫稿-七「最初は富の出番云々と売歩しが是を停止せられて後に於波奈志々々々と一の富許を書付て売り駈ありくこと市中縦横数十人也」

とみの札(ふだ) 富くじの番号や記号などを書いた札。*日次紀事-正月七日「摂州箕面弁財天女 今夜諸人競二集堂上一突二冨簡(トミノふだ)一」*和漢三才図会-七四「豊島郡〈略〉箕面山滝安寺〈略〉毎正月七日於二弁才天堂一数万小木札書二各姓名一納二櫃修法読経畢以一錐突二取於櫃孔一中一之者必得一福第二第三亦然謂二之富ノ札一」*滑稽本・東海道中膝栗毛-八・上「モシ、今あなたのおひらひなされたのは、富(トミ)の札じゃないかいな」*随筆・宝暦現来集-二「文政年比より天保二年に至り、流行之分を荒増集め見るに〈略〉一、富の札は町毎に売所多く、外商人の如し」

とみは一生(いっしょう)**の財**(たから)**知**(ち)**は万代**(ばんだい)**の財** 富は一代のみの宝で、死ねばなくなってしまうが、知恵は自分の死後も、のちのちまで人のために役立ち尊ばれる永久の宝である。*実語教「富是一生財、身滅則共滅。智是万代財、命終即随行」

とみは屋(おく・いえ)**を潤し徳**(とく)**は身**(み)**を潤す** 財宝が豊かであれば家が栄え、徳行を積めば、その身が尊く、立派になる。*文明本節用集「富潤」家徳潤」身(トミイヱヲウルヨシトク ハミヲウルヨス)〔礼記〕」*浮世草子・世間侍婢気質-一・二「富(トミ)は是家を潤(ウルヨ)し徳は身を潤す」*礼記-大学「富潤」屋徳潤」身、心広体胖」 古辞書文明

とみは節倹(せっけん)**より来たる** つましく、節約した生活をすれば、裕福になり、富を得る。

とみを突く 富くじの札を当たりをきめるために錐(きり)で突く。*講習余録・富突「世俗にとみをつくと云て、三銭・五銭を大分にもてはこびて一処に集め、其の内にて次第次第の高下・とく分を立て、少々三匁の銀にて、一人にて三十両・五十両取り来たるものあり」*談義本・根無草・後・一「壱歩札にて三百両の富を突(ツ)かせ」

とーみ 【跡見】〔名〕(「と」は「あと」の意)狩猟の時、鳥獣の通ったあとを見て、そのゆくえ、居場所を考えること。また、その人。*万葉-六・九二六「やすみしわご大王は み吉野の 蜻蛉の小野の 野の上(うへ)には 跡見(トミ)居(す)ゑ置きて〈山部赤人〉」

とみ 〔名〕方言魚、かわはぎ(皮剥)。伊豆八丈島134、大賀郷313

とみ 〔名〕方言①松飾りの代わりに立てる椎(しい)や樫(かし)の若木に結びつける米粒の紙包み。宮崎県西臼杵郡高千穂村三田井960 ②果樹の実を採る時に一つ二つ残しておくこと。高知県高岡郡別府843 ③贈物を受けた時その容器に入れて返す物。おうつり。徳島県祖谷809 高知県高岡郡別府843 〈ため〉土佐101

とみ 【頓】〔形動〕時間的に間がおけないさま。また、間をおかないさま。急。にわか。さっそく。「とみの」の形で連体修飾語として、また、「とみに」の形で副詞的に用いることが多く、現代ではもっぱら「とみに」の形で用いられる。「最近、人口がとみに増加した」*伊勢物語-八四「さるに、十二月(しはす)ばかりに、とみのこととて御ふみあり」*蜻蛉-上・天暦九年「とみなる召使ひの、きあひたりつればなん」*源氏-桐壺「みなみおもてにおろしてはは君もとみにえ物のたまはず」*宇治拾遺-八・三「倉のすみになげ置きて、とみに物も入れざりければ」*俳諧・おらが春「しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを」*和英語林集成(初版)Tomini トミニ。キュウニに同じ」 補注語源については「とし(疾)」の語幹に接尾語「み」の付いたものとする説もあるが、土左日記に見られる「とに」などの形から、「頓」の字音の変化したものと考えられる。 語源説(1)トミ(速・疾)の義〔伊勢物語古意・古事記伝・国語の語根とその分類=大島正健・大言海・日本語源=賀茂百樹〕。トシ(急)の義〔言元梯〕。(2)「頓」の字音から〔織錦舎随筆〕。 発音〈標ア〉①

どみ 〔副〕(多くく「と」を伴って用いる)「どんみり」に同じ。*虎明本狂言・磁石「きゃつがああといふたればたちのぢはだがどみとした」

とみい-まさあき とみゐ：〔富井政章〕法学者。京都出身。法典調査会起草委員として民法典を起草。日露戦争開戦時の七博士事件の一人。対露強硬論を唱えた。著書「民法原論」など。安政五～昭和一〇年(一八五八～一九三五)

とみ-お ：を【鴟尾】〔名〕「とびのお(鴟尾)①」に同じ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com